

校区のあゆみ

# 細谷

豊橋校区史

26

*Hosoya*

細 谷 町

細 谷









# 細

校区のあゆみ

# 谷



校区運動会 島別長縄飛び競技

# H O S

自然があふれる街——細谷

五並中学校開校記念砂浜運動会  
(開校時運動場がなかったため海岸の  
砂浜で行ったのが始まりです。)

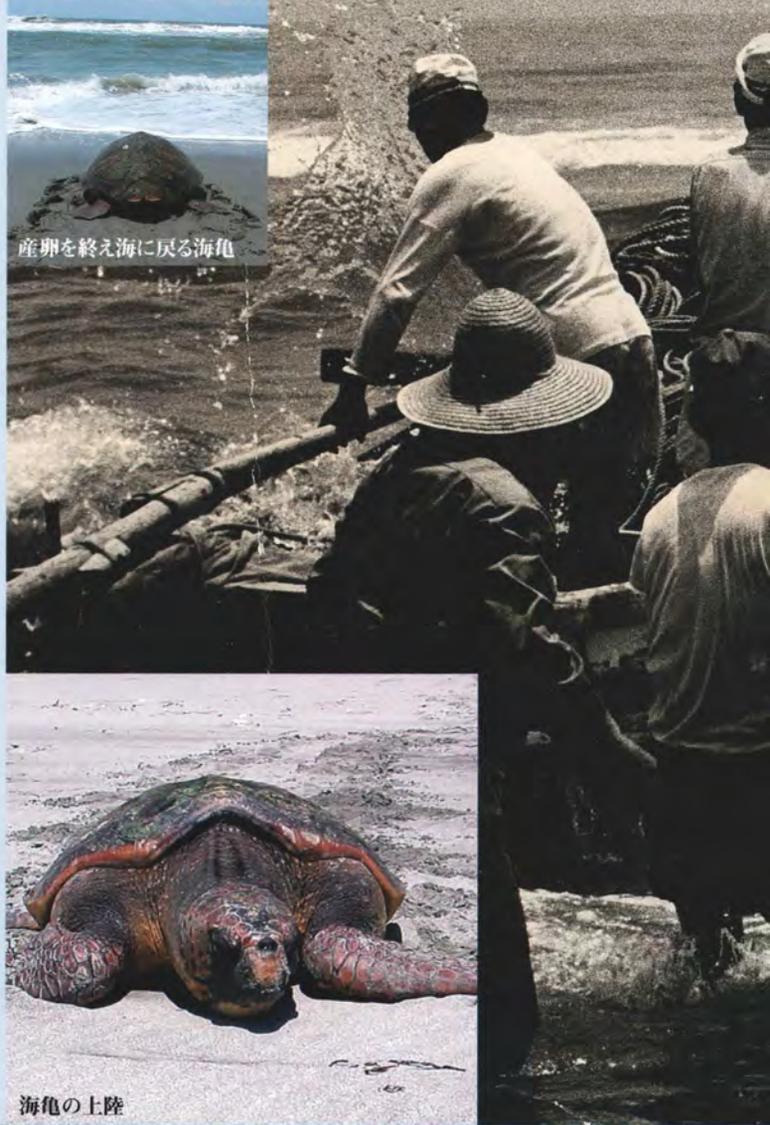


細谷海岸自生の浜屋顔

細谷小学校体験学習(全校生徒の地引き網)



産卵を終え海に戻る海亀

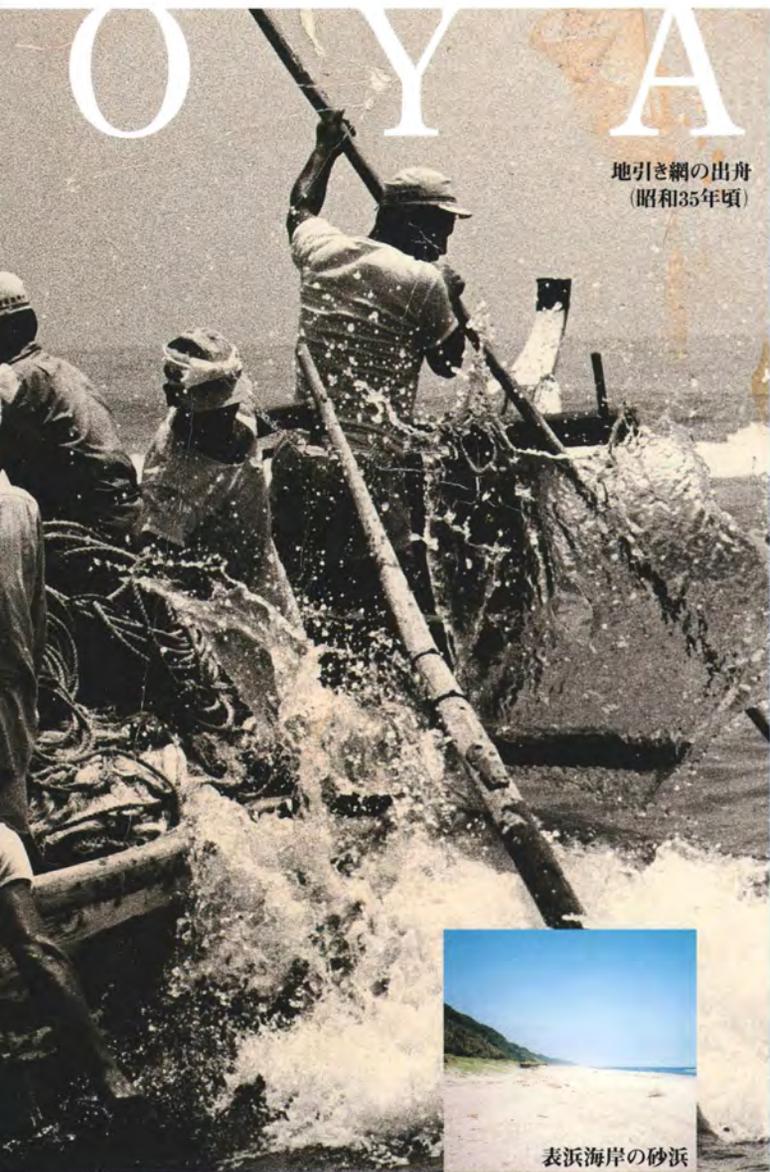


海亀の上陸



ビニールトンネルの西瓜栽培





地引き網の出舟  
(昭和35年頃)



海亀現地説明会



表浜海岸の砂浜

五並中学校連凧揚げ(小島海岸)



細谷町のたばこ畑



機械化されている  
東細谷町のお茶の摘み取り

農業が盛んである。

冬のキャベツ畑



温室の花弁栽培

東細谷町 医王寺



## 八十路会

80歳以上の方の集まりで、毎月2回、午前10時から和室でお菓子を食べながら世間話に花を咲かせ、ストレスを解消し、若返りをはかっている。

東細谷町 一里山八幡社



東細谷町 子供みこし



## 空手クラブ

市民館祭りでは、恒例になっている空手クラブ全員による形の披露と演武の風景。



青い目の人形(エセル・ディーン)  
細谷小学校所蔵



東細谷町 真月寺

# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋総代会長

西 義 雄

このたび、各校区のご努力により、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を刊行する運びとなり、関係者のひとりとして、心より嬉しく、また喜ばしく思っております。

この事業は、豊橋市制施行100周年記念事業の一環として、校区の歴史や文化、生活のようすなどをまとめたものであり、市内にある51校区すべてが揃って発刊できたことに大きな意義を感じます。各校区におきましては、校区で募った編集委員さんたちを中心に、資料の収集から原稿の執筆、校正作業など、多くの地域住民の方々が携わられたことと思います。今回の取り組みを通し、地域のつながりが広がり、また人々のふれあいが深まり、まさしく、とよはし100祭の基本理念である“新たな市民像を求めて～パートナーシップによる協働”を実践したものになりました。そして、これを契機に、各地域で新たな取り組みが始まるのが、とよはし100祭を一過性のものに終わらせることなく、次の100年に向けた“市民主体のまちづくり活動”につながるのではないかと思っております。

最後に、本冊子の発刊に際し、ご尽力、ご協力いただいた多くの市民の方々に改めてお礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。



平成18年度  
細谷校区総代会長

村 田 昇 司

日頃校区の皆様方にはいろいろと御支援御協力をいただき、ありがとうございます。

さて本年度は豊橋市制施行100周年を記念して、市総代会の音頭により校区史を発行することになりました。

編集委員に選出された方々や、資料提出していただいた方々等、多くのご協力により出来上がり感謝しております。

校区史としては平成元年「ふるさと細谷」が発行されており、今回の発行に当たり大変参考になりました。

私たちの住むこの地域も明治・大正・昭和と大きな変容を遂げました。

今、自分の暮らしを眺める時、多くの先人たちの生活向上、住みよい村づくりを目指した努力を思わずにられません。

私たちは常にこうした先人たちへの感謝の気持ちを忘れず、また次の世代に伝えるべく責任を負っています。

この冊子をご家庭にお届けしますので是非お読みいただき、昔の暮らしぶりを思い出したり、「じいちゃんやばあちゃんの子どもの頃は……」と子・孫へと語り継ぐ話題の一助になれば大変うれしく思います。

今後ともよろしく願い申し上げます。

# 目次

# CONTENTS

第1章 自然と環境	1 細谷校区の位置	7
	2 細谷校区の自然	7
第2章 歴史と生活	1 細谷校区のあゆみ	8
	2 産業の移り変わり	12
	(1) 農業	12
	(2) 水産業	15
	(3) 畜産業	18
	(4) 細谷農協のあゆみ	19
	3 校区の活動	20
	(1) 体育活動	20
	(2) 市民館活動	22
	(3) 校区内慶祝行事	23
第3章 教育と文化	1 学校教育と幼児教育	24
	(1) 細谷小学校のあゆみ	24
	(2) 細谷小学校の活動紹介	25
	(3) 緑が丘保育園のあゆみ	26
	2 史跡と伝統行事	28
	(1) 記念碑	28
	(2) 信仰と伝統行事	35
第4章 明日を見る	住みよい細谷をめざして	42
	〔附録〕	
	(明治以後のできごと)	44
	(太平洋戦争と子供たち)	46
	編集後記	52



# 第1章 自然と環境

## 1 細谷校区の位置

細谷校区は、豊橋市の東南に位置し、西は小沢校区、北は二川南校区、東は静岡県湖西市白須賀に接している。また、南にはアカウミガメの来る細谷海岸があり、遠州灘が広がっている。

校区には、東西に交通量の多い国道42号線が走っており、国道1号線へと続いている。

東経137度28分19秒  
北緯 34度40分59秒  
標高 71米

細谷小学校の校庭には、上記のように学校の位置を示した石碑(写真)が建てられている。



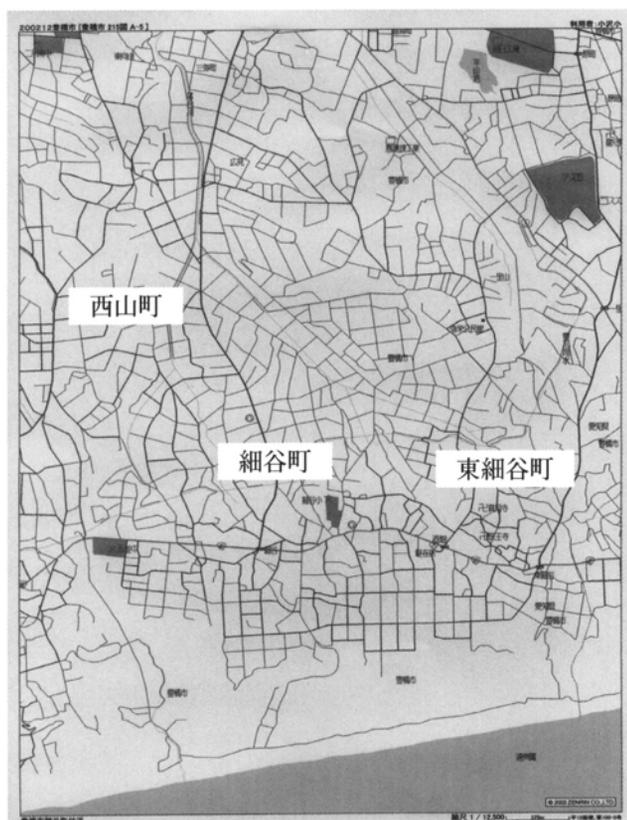
## 2 細谷校区の自然

緑豊かな細谷校区には、いたるところに森や林が広がっている。海岸沿いには雑木林が自然のままに残っている。民家の周りは森が多く冬の強い北風を防いでいる。

校区全体に田畑、茶畑が広がり、四季折々の作物が栽培され心ませる風物を見せている。

田植え時の田んぼにはツバメが飛び交い、シラサギも餌を求めてやってくる。キジの親子は、一年を通してキャベツ畑や田んぼの畦道に現われ、生き物が安心して住める環境となっている。

空の澄みきった日には、富士山が東の果てにその姿をくっきりと見ることができる。



## 第2章 歴史と生活

### 1 細谷校区のおゆみ

ア. 津波と移住 私たちの郷土、東三河の基は日本列島ができた頃で、その後地殻の変動や気候の変化を繰り返しながら現在に至っている。

この三河地方は、ほとんどが洪積世の地層になっており、今から6千年ほど前には古東海湖があったらしい。

隆起や沈降の繰り返しや陸地から流出した土砂の堆積により平野や島ができたらしい。

2千年くらい前この一帯の渥美郡は阿曇野連あずみのむらじといい、当時の支配者は綿積豊玉彦命ワタズミトヨタマヒコノミコトといわれていた。

「古事記」「国造本記」を見ると成務天皇（記紀による第13代天皇）の時代、物部氏の一族の知波夜命が支配していたらしいが、資料は全く残っていない。

時は流れ、室町時代の明応7年（1498年）9月20日、マグにチュード8.6の地震が起き、この時浜名湖は太平洋とつながり塩水湖となった。

このことは、天文8年（1539年）三河の国の国文書に出ているが、非常に大きな津波であったらしい。

それから宝永4年（1707年）にマグニチュード8.4、安政元年（1854年）の11月5日（今の12月23日にあたる）と大きな地震がこの地方を襲った。

その時の記録は、舞阪や新居へ行くと残っており、津波の高さは2丈余り（約6メートル）で、舞阪で45軒、新居の本町で3軒流失

したとある。

真月寺の建てられたのは永和4年（1378年）であり、そのころ南方約十町の海辺に十ヶ谷村とうがやむらというのがあり、その中に細谷・下細谷があったと言われている。

宝永4年（1707年）に津波があり、真月寺は享保2年（1717年）に今の所に上がってきたという記録がある。

細谷には福泉寺、幸福寺、海月院、宝聚庵、普門庵、医王寺などがあり、その頃上に上がってきたという。

このように私達の先祖は津波の起きる前までは、今の海の中にあたる地域に住んでいた訳で、その土地は作物のよく採れる肥沃な土地であったと思われる。

今私たちの住んでいる地域は、台地の上で決してよく肥えた土地とは言えない。

上に上がった当初は、瘦地の開墾に汗を流し苦勞の連続ではなかったろうか。

### イ. 記録にみる細谷

細谷校区史 1675年→1730年

延宝3年 上細谷村家数229軒。人数1,235人。

(1675) 男654人 女581人。

延宝5年 上細谷村家数214軒。人数1,314人。

(1677) 庄屋 庄兵衛 組頭 善兵衛。

延宝8年 志州鳥羽土井周防守領地と替わる。  
(1680)

御郡奉行 服部有右衛門

代官 高橋壺右衛門

大飢饉 米1両につき5斗5升、

麦1石2斗、稗2石。

この年台風5度あり  
 米1両につき3斗5升となる。  
 6月29日 7月9日 31日 (210日)  
 8月7日 14日  
 天和2年 古今めずらしい飢饉。米1両につ  
 (1682) き5斗5升 麦2石。稗1石4斗  
 餓死者70~80人。  
 貞享3年 3月大地震。  
 (1686)  
 貞享5年 6月台風。  
 (1688) 7月22日また台風。20軒倒壊。  
 その他かま屋等無数倒壊。  
 佐兵大庄屋仰せ付けられる。  
 元禄2年 高足、野依、七根、寺沢、小島、上細谷、  
 (1689) 山境について争論。  
 元禄3年 8月山境争論無事解決。  
 (1690) 朝倉仁右衛門大庄屋仰せ付けられ  
 る。  
 元禄11年 4月下旬より5月下旬迄降雨落雷  
 (1698) 死人もでる。  
 7月27日大水 この年流行病はやる。  
 元禄12年 8月15日大風大浪でだいぶ屋敷が  
 (1699) 欠ける。  
 元禄13年 上細谷中引っ越す。  
 (1700)  
 元禄14年 引っ越し続く。  
 (1701)  
 元禄15年 4月21日海月院古屋敷より引っ越  
 (1702) す。  
 9月19日八幡宮引っ越し祭りを行う。  
 元禄16年 海月院棟上げ11月22日八王子八幡  
 (1703) 宮遷宮。  
 宝永元年 村中引っ越し完了。  
 (1704)  
 宝永4年 10月4日零時すぎ大地震、南南西  
 (1707) の方だいぶ鳴り午前2時津波あり  
 村々の網、舟、漁具残らず流失。  
 谷は山に埋まり山は崩れて谷になり人馬とも

に死ぬ  
 赤沢、伊古部の海中浜中に島山ができた。  
 10月、11月、12月にかけて、日に5回、10回  
 とゆれる。  
 11月23日午前10時より終日北東の方でだいぶ  
 鳴ったので、舟、網残らず山の上へ運んだ。  
 午後2時頃より少しづつ間があり夜に入り東  
 北の方に高い大きな火の山が見え人々は大変  
 驚いた。  
 12月8日夜雨が降って火が見えなくなった。  
 この日までは毎夜火の山が見えた。後に聞け  
 ば、富士山の東一帯は焼け、三島から小田原、  
 戸塚あたりまで3メートルから6メートルの  
 火山灰で埋まったという。  
 米はだいぶ高価となる。  
 宝永5年 月に、1, 2回ずつ動き、人々は  
 (1708) 2カ月間、野山、畑中に仮屋し渋  
 紙その他を張り、仮住まいする。  
 正徳元年 朝鮮人来朝。10月8日下り、11月28  
 (1711) 日上り、上下共に三河の舟を残ら  
 ず新居に集め、舟1艘につき7両2分ずつ運  
 賃をくれた。両細谷は1両だったので訴訟し  
 た。  
 7月28日北大風。8月10日大風。23日大風。  
 9月28日大風。10月28日大風。  
 正徳2年 8月、9月2度大風。  
 (1712)  
 正徳4年 近年にない悪年。7月9日洪水大  
 (1714) 風。8月9日南風大風。  
 正徳5年 春飢饉。  
 (1715)  
 享保元年 7月26日午前4時より8時まで東  
 (1716) 大風。日暮午後6時またまた西南  
 大風。70~80軒倒壊。  
 享保2年 8月15日東風大風。  
 (1717)  
 享保15年 伊勢御遷宮。  
 (1730) 春、竹、根笹、共に残らず竹の実

がつき笹は絶えた。

竹の実を取り2～3カ月食べた。後は俵に入れて保管したが干しの悪いものは俵の中で発芽してしまった。

**ウ. 西山の開拓** 西山が現在まで歩んだ道は、大正10年代初期頃、時の土地所有者が農園を計画し西山の中心部を開拓して、中村農園と名付けてお茶の栽培を行なった。一部には、柿・桃・栗・梅などの果樹も栽培され、その肥料対策として豚の飼育を計画し、2箇所養豚場を設立し、使用人を置いて経営を行なった。それ以前は、西山52町歩の原野には住居は無かったとのことである。

しかし、農園計画もうまくいかず、農業を行う人は自由に土地の売買を行うようになり、昭和10年頃までは12戸前後の人が開墾と農業に精を出していたとのことである。

昭和10年以降だんだんと戸数も増えて、昭和15年頃には18戸前後になったようである。

その頃、「公民館（集会場）を建てようではないか。」との話し合いが出来て、1反歩の土地を西山の中央部に買い求め、約30坪の小屋を建て戦後まで利用してきた。

小屋は、鍵田町にある古家を買求めたもので、取り壊しに行くのに、当時の運搬車両は牛車・手車・リヤカーを利用した。西山には牛車が、1台で、あとは手車やリヤカーだったので。朝、空車を引いて鍵田町へ向かうのだが、片道3～4時間かかるので、その行列は本当にユーモラスな光景であった。でこぼこの砂利道を、牛車の後ろに手車を、その後ろにリヤカーをと次々に縛り付けて、その長さは、10～15メートルになり、その上に乗ってふざけたり、話をしたりのんびりムードで1号線を通して、ゆうゆうと鍵田町まで往復するので運搬には3日も4日もかかった。

国道も、通るのは自転車・リヤカーたまに

路線バス・小型トラックが砂煙を上げて通るだけだった。

公民館の建設と前後して墓地の計画も進み、現在の墓地の基を作ったのである。

太平洋戦争中の西山の農地は大半がお茶畑だったが、食糧増産時代に入りサツマイモ・麦類が多くなった。

昭和20年代は戦争も終わり、西山に明るい出来事があった。それは電気が引けた事である。

戦時中、軍隊が西山公民館を宿舎にしていた時、地原地区から電気を引いていた。その仮の施設を本格的なものにしようと、各方面に運動を行い、西山に電気が引けたのだが、それは大変な事であった。物資の少ない戦後のことで、計画してもなかなか進まず。戸数は少なく地域は広く多くの電柱が必要なので大変だった。

そこで、各方面に協力をお願いしたところ、戦時中に軍が伐採した杉、檜の丸太が石巻嵩山地区にあり、払い下げを受ける事になったが運搬は地元で行うわけで、昭和21年1月の寒い時期に嵩山地区の民家を借りて、寝泊りして山から丸太を道路端まで担ぎ出し牛車に積んで運び、昭和21年の暮れから22年に掛け全戸に電灯がつき、ラジオが聞けるようになった。（当時の戸数約30戸）

一方、戦後の食糧難時代で畑作のみの西山には米が無く、サツマイモや麦の生活が続いた。その上、供出の割り当てがあり、作付けはしても肥料が手に入らず、収穫は上がらなかった。

昭和30年代に入ると、西山の戸数は40戸前後になり、農家の作付けも冬は大麦、小麦、大根・夏はサツマイモ、スイカ、お茶など農家にとっては一番安定した時期だったようである。

昭和30年には、二川町が豊橋市に合併し西

山町になった。(以前は二川町大字上細谷字西山であった)

昭和40年代には、西山町も50戸前後になり、出荷物も増え出荷場が必要になり、公民館兼出荷場を建替その後、改築をして現在の公民館になった。

昭和41年には、西山地区の土地改良事業が始まり、前後して豊川用水畑灌工事が始まった。

この工事は昭和43年2月には完成し、受益面積は一部地原地区を入れて約50町歩となり、農作物の作付けも野菜中心に変わってきた。

昭和40年代半ばには、町内中心部に2～3の工場が進出してきた。地価も上がり町内の戸数も増えてきたが、農地はこの頃から減少し始めた。(平成17年現在約40町歩)

昭和50年代に入ると、町内の道路もほぼアスファルト舗装になり、排水溝も整備された。

昭和56年春には西山町、地原、西縄口に上水道が完備し、西山町の受益戸数は約80戸であった。役員の方々には大変ご苦勞をお掛けした。

平成元年には、五並地域下水道が完成し、町内の半数近い戸数が恩恵を受けたが、全戸数でないのが残念である。

国道23号豊橋東バイパスが、西山町の南部を通過することになり、平成17年度に用地買収が行われた。

このようにして西山に農園ができて85年余りの年月を経て現在の西山町になったのである。



西山町公民館 (平成18年)  
(地震対策のため屋根をステンレス鋼板にした)



西山町墓地 (平成18年)



西山町南部高台の国道23号バイパス開通予定地 (平成18年)

**工. 第八弥栄の開拓** 昭和6年に満州事変が始まり、満蒙開拓が始まった頃愛知県の農政課が、満蒙開拓も結構だが愛知県のようにはずいぶん開けた県でも荒れた土地がたくさんあるので、省みてはどうかと相談があったようである。

そこで、安城農事試験場に依頼して、この土地の土壌検査をして貰うことになり、安城農事試験場農芸化学部の土壌検査の結果、強酸性でリン酸成分の少ない土壌であることがわかった。

その結果、石灰を施して酸性を中和して燐酸肥料を施せば作物は実ることがわかった。

そこで、開拓者を募って開拓を行うことに決まり、愛知県農政課が開拓者を募集した。

開拓地の名前は、農事試験場が安城農林学校の初代校長 山崎延吉先生に依頼して、名前を付けていただいた。「弥栄<sup>いやすかえり</sup>」である。

当時開拓地があちこちにあったので、番号を付けて呼んだ。

第1弥栄：渥美郡杉山の百々原<sup>どうどうばら</sup>、(現 豊橋市)

第2弥栄：渥美郡二川町三ツ家 (現 豊橋市三弥町、二川南小学校校区)

第3弥栄：碧海郡鴛鴨<sup>おしから</sup> (現 豊田市)

第4弥栄：知多郡緒川の相生地区

第5弥栄：西加茂郡三好村

第6弥栄：瀬戸の旭村

第7弥栄：宝飯郡一宮村

第8弥栄：渥美郡二川町下細谷(現 東細谷町)

以下は、稲垣義雄さんに伺ったあらましである。

昭和12年12月に私たちはここに入植した。

入植後は毎日一升飯を食べて、一鍬一鍬一生懸命に開墾した。

初作はスイカが良いと言うことで、スイカ・パレイショ・ダイコン・実取ダイコンなどを作った。先輩から苦勞話を聞いていたので、お陰で私達は失敗が少なく作物を作ることが出来た。

作ったスイカは、豊橋第1青果市場の車で毎日200貫ずつ出荷し委託販売を行った。評判は、少し形状は悪いが味は非常に良いとのことで、市場では弥栄スイカの名で評判になった。

そこで、通信省勧誘保険の低利資金をかりて、地主から1反歩65円で土地を買取った。

入植2年目に、豊橋第一青果市場の田中場長から黒板2枚を貰い、その黒板は現在も

使っている。(現 弥栄公民館に掛かっている。)その後、事務机1脚も貰った。

第2次世界大戦に数名の出征兵士を出したが、全員無事復員したので戦後も人手にはあまり困らず農業を営むことができた。

その後、弥栄の農業は着実に発展しつつ、現在を迎えている。



第八弥栄 報徳二宮神社と開拓記念碑

## 2 産業の移り変わり

### (1) 農業

ア. 養蚕と戦中戦後の農業 明治の初め、朝倉仁右衛門や前田伝次郎らの殖産興業の努力により、細谷の養蚕業は年々成果を挙げ、昭和の初期には最盛期を迎えた。

当時、畑のほとんどは桑畑となり、農家では一年を通じてなんらかの形で養蚕に関わる仕事をしていた。

蚕の「はきたて」は桑の芽が吹くと同時に始まり、桑の葉の状態により春1回・夏2回・秋1回の計4回行なわれた。

「はきたて」とは、1回のサイクルのうちの最初の段階で、「種紙」(A3くらいの大きさの紙に楕円形に蚕の卵を産み付けたもの)を温度の高い部屋で孵化させることをいった。

「種紙」は、蚕の伝染病予防対策が施された正規ルート以外からのものの使用はできなかったため、家で成虫になった蛾に卵を産ま

せることは禁じられていた。

また、「種紙」は、低温で保存しなければならなかったため、富士山の風穴で保存されたものを購入したと言われている。

蚕は卵から孵ると毛蚕と呼ばれ、温度、湿度、伝染病等に細心の注意を払いながら育てられた。

初めのうちは狭い場所で飼育できるが、脱皮を繰り返して大きくなるにつれ広い場所が必要になる。

お蚕様と呼ばれるように、家の中は蚕優先で座敷・居間の区別なくどの部屋も蚕の棚で埋まり、人間は部屋の隅に追いやられ、畳1枚の上で眠る有様だった。

養蚕の中心は大方年長の婦人であり、男の人は桑の葉の取り入れや桑畑・水田の管理が主で子どもは繭を「やま」からはずしたり、「けばとり」の機械を回すなど簡単な仕事を手伝った。

出荷された繭は蛾の出ないように熱処理され、豊橋の乾繭取引所で取引され、生糸に加工する製糸業者に買い取られていった。

この養蚕も、戦争開始による生糸の輸出減少とともに衰え、桑畑は麦・いも畑に変わっていった。

戦時中から戦後しばらくの間食糧不足が続く、食糧統制が行われていたために自由販売はできなかったが、サツマイモは芋切干やいも飴に加工されてヤミルートで売られていった。

農協では、上細谷の上大附地内の製糸工場跡地の水量豊かな井戸を利用して澱粉加工工場を建設し大量のサツマイモを処理した。

秋になるとこの工場の原料置き場には、サツマイモの大きな山ができた。

秋播きの大麦や小麦は、自家消費分を残し他は政府に売り渡された。

戦中戦後の食生活を見ると、糖分の不足が

挙げられる。

この対策にと、畑でサトウキビを栽培し子どものおやつに利用しただけでなく、共同で黒糖に加工し、貴重な甘味料として喜ばれた。

- ※ 「やま」とは、蚕が繭を作りやすいように藁で三角形に編んだものをいう。
- ※ 「けばとり」とは、繭の外側にある細かい糸を、繭をきれいにし扱いやすくするために機械で取り除くこと。



和牛による鋤起こし

#### イ. 耕地整理と豊川用水



満々と水を湛える豊川用水

細谷の農業は、豊川用水の通水と土地改良事業によって大きく変わった。私達の念願であった豊川用水工事が、昭和38年頃、一里山地区から五並中学校北側まで着手された。工事は、昭和41年完成し通水となった。

さて、豊川用水の着工と平行して、水を有効に利用すべく農地整備をしなくてはならない。そこで、土地改良事業が始まった。細谷

には、山や原野がたくさんあり、その山林等は、農林省に買収してもらい整地工事や道路及び排水路等を作る工事が行なわれた。圃場は、作業がしやすいように、また、灌水が出来るように、おおむね1区画2反歩（20アール）以上に整地された。昭和45年頃、旧地主が農林省より買い受け、この土地改良事業は終わった。その面積は約77町歩（77ヘクタール）であった。

農地整備は、いくつかの地区にわけて進められた。昭和40年頃、県道南（細谷地区）土地改良事業では、面積約104町歩（104ヘクタール）、この地域は、宅地あり永年作物（果樹・茶）ありで工事を進めるにあたり難しい所もあったようだ、がやはり1区画は2反～4反（20～40アール）位に整備された。

続いて、隣接地域の近見山地区は、20町歩（20ヘクタール）で、次に細谷第2地区、この地域は、ほとんど水田地帯で、1区画2反歩（20アール）、用水排水道路また、河川等含めた土地改良であった。面積は、約50町歩、昭和42年度事業で実施した。

これより先、昭和41年、畑地水田併用の土地改良事業、苜蓿・棟曾利地区の畑地23町歩、水田7町歩でも工事が施行された。

話は前後するが、細谷北地区土地改良事業が昭和44年から45年にかけて、面積約50町歩（50ヘクタール）1区画2反（20アール）位で実施された。この地区は、細谷から二川へ県道も含めた工事で色々困難もあったようだ。この他、小規模土地改良事業もあり、昭和45年、ほぼ完了した。

その面積は、水田180町歩（180ヘクタール）、畑地300町歩（300ヘクタール）が立派な農用地に生まれ変わった。

豊川用水の水が支線を通じて水田へ、また、畑地へは細谷地内6箇所のポンプ場からパイプラインで送られる。そして、取水口か

らスプリンクラーで灌水するというシステムで行きわたるようになった。

しかし、喜んでばかりおれないこともあった。ダム貯水量が少なくなったり空になるので、節水をしなければならないことが生じた。

ここで、細谷の農産物のあゆみを見てみよう。昭和20年から30年代は、食糧増産時代は、米に麦、そしてサツマイモが主な産物だった。米や麦は、俵に入れて自家保有に一部残して、後は検査を受けて政府米として供出した。サツマイモは、農協の澱粉工場へ、その他の産物としては、スイカ、ダイコン、葉タバコなどだった。ダイコンは、ほとんど漬物用で、共同でタンクに漬けて大阪市場へ出荷した。

秋作の漬物用ダイコンの生産増加と共に大根のセリ市が開かれるようになった。

耕地整理の行なわれた畑の中央を東西に走る道幅の広い幹線道路には、夕方になると6本ずつに束ねられた大量の大根が並べられた。

セリは東から始まる日と西からの日が交互に行なわれ、出荷量により、初めと終わりでは値段に微妙な差があったようで、並べる場所取りにも気を使ったようである。

また、寒い夜に凍らせると商品価格が下がるので冷えが予想される日には、「むしろ」掛けも大変であった。

漬物業者は、買い取ったダイコンを風通しの良い川の堤防や田圃の中の道路に作ったはぎに吊して乾燥させてから、沢庵に加工した。

初冬の「ダイコンのはぎがけ」は、この地方の風物詩のひとつであった。

当時の農耕は、牛に頼っており、どの家でも牛を飼い、農耕には鋤、運搬には牛車と、牛なくしては農業を考えることができない時

代であった。

昭和35年ころ以降、耕耘機、トラック等、昭和40年代になってトラクター、田植え機、その後コンバイン等の機動力に変わり、営農の形も変わった。

農産物も時代の波、消費者の好み需要に合わせて変化し、露地ではキャベツ、白菜、玉ネギ、葉タバコ等の作付けが多く、施設園芸としては、メロン、ファーストトマト、ミニトマト、キュウリ、えんどうなどが栽培され、近年、花卉の生産も盛んになった。

最後に先程（昭和60年）計画決定された国道23号豊橋東バイパスは、せっかく整備された農用地の真ん中を幅70メートルという規模で東西に走るため農地は、分断され整合性が損なわれるであろう。このことを慎重に受け止め、今後の対策を考えなくてはならないと思う。

また、アスベスト問題の浮上により地中の石綿管の交換もすすめられている。



遥かに富士を望む

## (2) 水産業

**ア. 地引網** 南に遠州灘をのぞむ細谷では、古くから海との縁は大変深く、人々はその恵みを受けて生活して来た。

この地の漁業はその地形故に「地引網」という方法で行なわれており、上細谷、下細谷合わせて六つほどの網仲間があった。

各網の組織は、役付として網元・小網元・

会計・船頭・若頭があり、一般を含めて40人ほどで構成されていた。

かつては、6年生から浜へ出、はじめての人達は弁当を運んだ。

12歳から50歳くらいまでの人が浜で働いていた。

天気の良いければ一日中崖の上の「はね」と呼ばれる場所で、「山見」という人が魚の群れを見張っていた。

魚群は水面の変化で見分けるため「いろみ」といわれ、いろみが見えると村の中を「ホイ・ホイ」と人集めのために呼んで廻った。

この声を聞くと家や野良にいた網仲間の人は大急ぎで浜へ出かけた。

子どもたちも浜籠を持ち、えんばいわけ目当てに浜へ足を運んだ。

網をかける舟は「おおぶね」と呼ばれ、櫓枕が2本あり、櫓は前2丁、後2丁と梶取りとしての櫓、最前部には竿をさす人、更に網を出す人など、合わせて15～16人ほど乗っていた。

舟を浮かべると山見の合図に従って進み、網をおろした。

網の部分の長さはおよそ決まっているので沖網をかける時はロープをたくさん使用した。

網をかけ終わると「えんとまき」というろくろを牛や人の力で回して引き上げた。

このえんとまきは下細谷の杉浦六太郎という人が、九十九里浜から導入したといわれる。

浜に来た女の人や子どもたちは、えんとまきや網につかまって手伝い、とれた魚の一部をえんばいわけという方法で、手伝い賃としての分け前をもらうことができた。

魚が沢山獲れると大漁のぼりが立てられ、その本数で獲れ高の度合が想像できた。

大漁の日の夕方には「裸まいり」といって、

魚をカカミ（大きなたも）に入れてかつぎ、威勢のいい掛け声をかけながら氏神様におまいをした。

漁獲物は、タイ、スズキ、アジ、サバなどは生で問屋や仲買いに売り、シラスやイワシ、コウナゴなどは煮干しに加工して出荷した。

大イワシなど大漁でさばききれない場合には、ほしか（砂浜に生のまま干す）として肥料として利用された。

給料（分配金）は「代」といい、網元が2口（二人分）、小網元が1口半、船頭1口2分、普通の人が1口、入りたては5分というように、経験年数や役柄によって決められていた。（1口を100とすると1口半は150の割で計算する）

また、数人で仲間を組み、「ちよろ」という小舟を持ち、「ずり」という方法で、ヒラメ、カレイ、コチなどを獲ったり、かくわでナガラミ（キサゴ）を獲る漁法もあった。



「おおぶね」と呼ばれた地引網漁に使用した舟



舟を浮かべ沖を目ざす

終戦後、ナガラミの大豊漁の年があり、食用だけでなく、ローラーで潰して乾燥し肥料

にしたこともあった。

#### イ. 地引網にかかわる事件

打瀬網事件（漁場を巡る争い）

打瀬網漁法とは、網を船で引いて魚を捕獲しようとするもので、網の規模はさほど大きくはないが、機動性があり、海岸からの距離・地域にかかわらず魚群を追うことができる。

この漁法は亀崎あたりが発祥の地とされ、明治5、6年には東渡合や渥美外浜に出没するようになり、年々数や範囲は拡大された。

これは、表浜で地引網を営む漁民にとって生活にかかわる大きな問題であった。

ちなみに、明治14年から10年間の漁獲高を見ると3分の1に減少したといわれる。

そこで、各地の村長・網元や郡漁業組合長が県当局に再三陳情に出向いた。

その結果、明治22年3月に打瀬網漁法の操業を禁止する県令が出た。

ところが、期限が来ると、2年、半年、当分の間とたびたび延期され、無期延期となった明治24年の末のころには、漁民の怒りは頂点に達した。

翌明治25年2月末、打瀬網禁止の実施を求めて表浜の漁師たち700人余が渥美郡役所（今の豊橋公会堂付近）に押しかけた。この事件を「打瀬網事件」という。

この際、デモ隊の出発前に「器物破損は騒乱罪になるから決して行ってはならない。」ときつく注意を与えて出動したが、一部の者がガラスを割るなど器物破損をしてしまった。

そこで、202名が検挙され、150名罰金、重禁固14名（このうち小島の網元戸田五郎左衛門は獄死）という多くの犠牲者を出してしまった。

このような事件が起こったが愛知県は、打瀬網の禁止を実施しなかった。

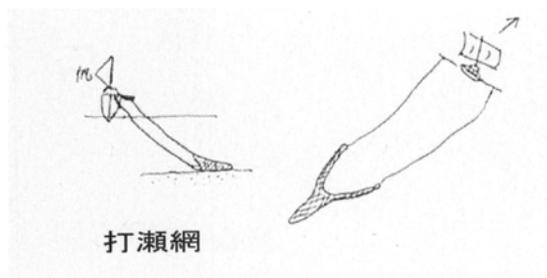
しかし、三河打瀬網騒擾事件と呼ばれるこの騒動は、時の農商務省を動かし、事件後直

ちに専門家による調査も行なわれ、県知事が3名も変わるという大事件であった。

その後も限られた範囲で網を引く地引網漁民と動力シラス漁船とのにらみ合いはきえることなく、昭和24年8月舞阪の漁船との間に洋上での乱闘という事件が起きた。

この事件は、第二の打瀬網事件とも呼ばれている。

この事件は刑事事件として扱われたが、以後漁業組合間で話し合いがなされ、県境を境として区域を守り操業されるようになった。



打瀬網

#### ウ. 海浜の保全と利用

(美しく安全でいきいきとした海岸をめざして)



日の出と消波堤

国の海岸制度は、昭和31年の海岸法の制定により、農林水産省、水産庁、運輸省、建設省（当時の呼称）の海岸4省庁による海岸管理が開始された。

このことにより、毎年のように来襲する台風時の高潮や大地震による津波などから、海岸の後背地に住む多くの人命や資産を護るための方策がとられてきた。

二川漁港海岸に属する細谷地区では、昭和58年度から消波堤の建設が始まり、2,410メートル設置され、平成2年度に完成している。

この海岸法は、防護のみを目的としており、海岸に対する国民のニーズに対応したものでなかった。

そこで、防護、環境、利用の調和のとれた総合的な海岸管理が望まれ、平成11年に海岸法の一部改正が行なわれた。

この改正により、今後次のような整備が望まれる。

#### 1、交通アクセス

- ・交通安全をふまえた地域全体の道路整備。

#### 2、海浜部の開発

- ・海岸部の遊休地の活用。
- ・駐車場、芝生広場、キャンプ場、スポーツ施設等、誰もが安心して利用できる施設の整備。
- ・自転車道、遊歩道等、地域全体を見通した開発・整備。

#### 3、環境の保全と今後の課題

- ・ゴミの不法投棄、産業廃棄物処理場建設への対応。
- ・砂浜や海浜植生とアカウミガメ上陸産卵の環境保全と海岸利用者の安全確保。

**地域の取り組み** 「きれいな海」を目指して海岸清掃が行なわれている。



海岸清掃

5月の「530運動」をスタートとし、ゴミの増える夏を中心に、年間6～7回日曜日の早朝に実施している。

初めは、校区内の団体役員が中心であったが、最近ではサーファーの協力もあり、校区民全体に呼びかけた結果、小中学生が親子で参加する姿も見られるようになった。

**アカウミガメが上陸・産卵する浜に** 遠州灘をのぞむ海岸には、アカウミガメが5月中下旬から8月下旬にかけて、暗くて静かな砂浜に上陸し、毎年のように産卵が行なわれていた。

昭和34年この地方を襲った伊勢湾台風により海岸浸食問題が浮上し、以後各地に護岸堤防や消波堤が造られるようになった。

細谷地区においても消波堤が建設され、その結果、砂浜部分が減少し、アカウミガメが安心して産卵する場所が少なくなった。

ウミガメが上陸するとキャタピラーのような足跡が残る。

早朝の海岸で見かけたこの足跡により前夜にカメが上陸したことを知ることができる。

砂浜に上陸した母ガメは、必ずしも産卵するとは限らない。

海岸での焚火や花火の光や音に驚いた時や産卵に適した場所が見つからないと卵を産まないで海に帰ってしまう。

ウミガメの上陸には音や光は禁物である。

アカウミガメは爬虫類の仲間であり、外界の温度によって体温が変化する変温動物である。したがって、産卵のために上陸する時期は水温の高くなる夏に集中し、満潮時にも波がかぶらないように砂浜のできるだけ奥の方に産卵する。

また、砂中に産み落とされた卵は、孵化するための条件や稚ガメが雄か雌になる比率が砂中の温度により大きく左右される。

孵化温度が26℃～28℃では、生まれる稚ガメは全て雄、28℃以上では約70%が雌である

という。(32℃～34℃の実験では100%が雌であった。)

地域では、一旦減少した上陸・産卵回数を回復させるために、有志による保護活動が行なわれているが、今後砂浜の保護その他の取り組みが必要である。

平成18年2月からの砂浜へのレジャー用自動車乗り入れ規制は喜ぶべきことである。

カメの上陸・産卵回数の増加は自然回復のバロメーターといえる。人間にとってもカメにとってもかけがえのない自然を取り戻したいものである。



産卵に上陸した海亀



朝日を浴びて大海原へ

### (3) 畜産業

**ア. 養鶏** 鶏飼いは、農作物の屑雑穀類を家畜のえさとして有効活用し、少数の鶏を飼い家族の動物性たんぱく質を確保していた。

鶏種は、白色レグホン、コーチン、チャボ等で特に、チャボは巣籠もりの周期が早く卵

を抱かせて孵化し<sup>いくすう</sup>育雛、飼育羽数の継続用として飼っていた。卵の一般需要の対応と現金収入を目的にひよこ屋（孵化場）から雛を買い飼育羽数を殖やし副業化専門化が進んだ。

副業は主に老人、おばあちゃん養鶏で餌はふすま、とうもろこし、魚粉、青菜等を混ぜた自家配合で平面飼いが一般的であった。卵の出荷は組合が集卵選別し木箱に糊殻で詰めて京浜方面に出荷していた。

地原にも組合の出張集卵所があり大型農家はリヤカーで出荷していた。「たまごや」（集卵業者）は訪問集荷で定期的に集卵していた。

また、「とりぼて」（廃鶏業者）と呼ばれる養鶏農家を巡回して病鶏、廃鶏を買い集める人も活躍していた。

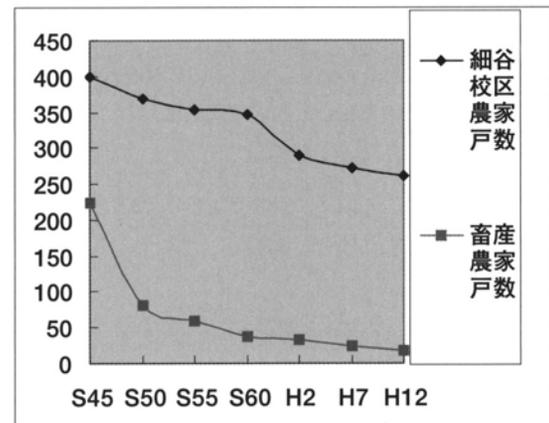
昭和30年代に專業養鶏農家は小面積で多羽数飼育として バタリー式立体飼育が普及し、やがて飼育管理の効率が高いケージ鶏舎出現と配合飼料メーカー、孵化場育雛業者の拡張競合で大規模飼育企業養鶏の時代が始まる。

鶏種も孵化場が飼料効率の高い鶏を求め外来種（ハイライン、パブコック等）を専属契約し急激に導入されオールイン、オールアウトの飼育管理による企業養鶏が出現し、大規模企業養鶏に押され小規模の專業、副業養鶏農家は急速に減少した。

また、大規模飼育の弊害として今までに無かった鶏の伝染病 ニューカッスル病が発生、大流行で養鶏業者、農家は大被害を受けた。特に副業のおばあちゃん養鶏も被害甚大でこれを機にコスト面でも大型に押され消滅の道をたどる。

昭和40年後半より環境面で西山町内に專業養鶏家が増える。

がしかし、昭和60年代より減少した。



▲細谷校区農家戸数並びに畜産農家戸数  
畜産農家（乳牛・肉牛・養豚・養鶏）

#### (4) 細谷農協のあゆみ

渥美郡二川町農業会の南部支所が、現在の細谷支所の前進である。農業会の解散と、細谷農業協同組合が昭和23年5月に発足、翌24年6月に現東細谷町旭島を中心に、68名で下細谷農業協同組合が設立され、南部支所は2つの農協が誕生した。当時は食糧事情も悪く、農産物は主要食糧として、米、麦、甘藷であり、畑の夏作は甘藷で澱粉に加工されていた。澱粉工場は農業会当時、20万貫（750トン）の処理能力があったが、解散により細谷農協が引継ぎ、機械設備の更新等で最高時には100万貫（3,750トン）の加工処理を行なった。戦後の、社会情勢、食糧事情も好転し、又澱粉も安い製品が輸入されるようになり、畑の夏作物は甘藷から葉たばこ、西瓜へと急速に変わった。又冬作も麦作から大根へと変わり、加工用大根のセリ市も開催されるようになり、生食用と合わせて大根の大産地になった。豊川用水の灌漑設備と、農地基盤整備事業も進み、一農家当りの耕作面積も大きくなり、大根、キャベツ、白菜の畑作主体の野菜産地となった。

畜産については養鶏が盛んであったが、專業農家はなく、副業養鶏で、戦後の肥料不足の対策と、年間通じての収入源として、農協

は愛知県追進農場より、白色レグホンの原種に近いヒナの導入と、その普及につとめ、集荷には選卵機の設置等により有利販売をしてきた。

昭和32年農業改良普及員の助言もあり、組合員農家の施設の合理化と、生産コスト削減を目的に肥料の配合機を購入し、作物別肥料設計を作り、原料仕入れによる有機配合等、自家配合（農協配合）による施設指導により、農協の肥料の取扱も飛躍的に増大し、農業生産コスト削減に貢献した。

生活購買事業では、特に婦人部活動として共同購入運動を行ない、正月、盆、祭り等の時期に必要な食品の取りまとめによって原価供給し、また、サンマ等のシーズンには、市価の約半値で供給し、保存食の指導により大きな評価を得た。この時は業者からの苦情も多々あったが、共同活動の実践を行い続けた。

管内地域の住民の情報連絡の施設として、昭和34年4月に有線放送電話を設置し、常に新しい情報提供と、組合員間相互の連絡等、管内生活環境改善に大きく貢献した。

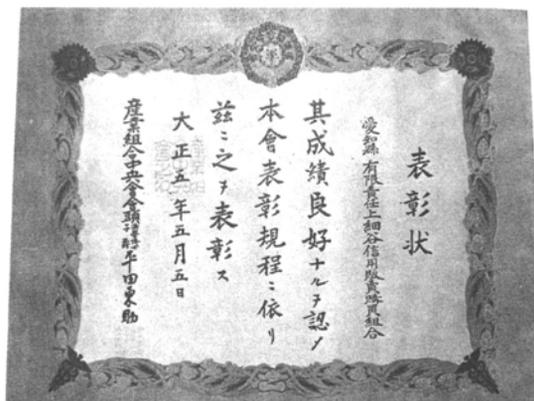


前の南部農協細谷支所

昭和34年4月に下細谷農協を吸収合併し、細谷校区単位の農協となる。

昭和40年には鉄筋コンクリート2階建の農協事務所を新築し、時代の流れモーターゼ

ーションに対応するため、ガソリンスタンドの開設を行なった。



産業組合中央会よりの表彰状

なお、細谷農協の前身発祥は明治42年で、発起人は時の先覚者、朝倉貞次氏によって上細谷信用販賣購買利用組合が設立され、事業活動の場として、朝倉氏が自分の屋敷を提供しており、現在の豊橋農協細谷支店の場所が、そこである。

### 3 校区の活動

#### (1) 体育活動

細谷校区の体育活動は昭和61年から、スポーツを通して「心ふれあうふるさとづくり」をテーマに、次の3つの大会が盛んになった。

##### ① 細谷校区ソフトボール大会



この大会は、昭和60年に第1回が行われ、第4回大会では五並中学校と細谷小学校の校

庭に、男女34チーム、総試合数31試合、総勢500人余りの参加によって大変盛り上がった。

校区の戸数が約500戸だから、1軒に1人、つまり校区の家庭総てが、この大会に参加したことになる。

第4回大会が、このように盛り上がったのは「コミュニティ広場夜間照明」が、細谷小学校校庭に設置されたことによるものである。

この施設の点灯式は、昭和63年7月9日に行われ、照明のお陰で早朝練習だけではなく夕方の練習も出来るようになり、練習の輪が広がって各チームの結束が高まったのである。

1度の練習より、2度、3度と回を重ねることによって、技能が向上するだけでなく、今までよりも心が通いあうようになったわけである。

残念だが、平成9年8月24日の第13回大会後中断されている。

## ② 細谷校区運動会

この運動会は、昭和63年度が初めての開催で、これまでは、細谷小学校が主催する運動会の仲間に入れてもらい参加していた。



校区運動会 長なわとび

地域が学校に協力することを止めたのではなく。協力とは別に、私たち住民の手で企画運営する運動会こそ地域のコミュニティ活動なのだ、という考えの下に実施に踏み切ったのである。

実施日（昭和63年10月30日）は、会を主催する体育委員の心の中は心配が渦巻いていた。「何人の人が集まってくれるのだろうか。」と選挙の開票を待つ心境であった。

ところがどうだろう「村の中（細谷校区）が、空っぽになったのじゃないか」と言われるほど大勢の方が細谷小学校の校庭に集まり、盛大な運動会となった。

その後「やらまいかん」を合言葉に毎年10月に実施されており、第18回細谷校区運動会は平成17年10月23日に行われた。

今後も、当初のねらいをふまえ、末永く、継続されることを望むものである。

## ③ 細谷校区バレーボール大会

毎年11月・12月に行う細谷校区婦人会の行事であるが、細谷校区体育委員も協賛して開催される。

大会当日の細谷小学校体育館は、早朝から日暮れまで、館内は響きわたる歓声と熱気に包まれお父さんと子どもが弁当を持って、お母さんの応援に来る姿は、他の大会では見られないほほえましい風景で、これこそ「コミュニティ活動の成果だなあ」と心が温まる。

これから先、このスポーツ大会をマンネリ化させないように、コミュニティ活動が活性化するように、校区の皆さんのご意見を承りながら、体育委員長もアイデアを働かせ細谷に住む私たちみんなで楽しめるスポーツ大会を目指すよう望むものである。

例えば、ソフトボール市民大会への出場や、夜間照明施設を有効に利用する手段を工夫するとか、男性も参加するバレーボール大会の可能性を探ってみるなどである。

校区のちびっ子から、おじいちゃんおばあちゃんに至るまで、校区民が一堂に集まり、スポーツを通して「心の触れ合うふるさとづくり」ができれば素晴らしいと思う。

## (2) 市民館活動

**ア. 開設と利用状況** 昭和47年、豊橋市は高齢者の増加、高学歴、産業構造の変化、情報化の進行により、市民生活の変化に対応した社会教育活動が出来る施設の充実構想を打ち出した。

その具体化が、地区市民館と校区市民館の設置である。

地区市民館は昭和49年から平成元年にかけて、各中学校区に一館ずつ設置され、校区市民館は昭和55年から昭和60年にかけて、各小学校区に一館ずつ設置された。

五並地区市民館は昭和53年5月11日に開館した。

住所 豊橋市細谷町字上大附98-9(八柱神社境内)

電話 21-2729

構造 鉄筋コンクリート2階建 延床面積 463.82㎡

1階 事務室、図書談話室、実習室、和室、湯沸室、倉庫、便所

2階 和室、集会室、湯沸室、倉庫、便所

対象地区 細谷町、東細谷町、西山町、小島町、小松原町、寺沢町、富士見町の7町である。

細谷校区市民館は昭和58年4月1日に開館した。

住所 豊橋市細谷町字中ノ島54の1(細谷小学校校内)

電話 21-2943

構造 鉄筋コンクリート2階建 延床面積 360.59㎡

1階 事務室、和室、図書室、実習室、便所

2階 集会室、児童室、小会議室、倉庫、

対象地区 細谷町、東細谷町、西山町の3町である。

利用状況 昭和63年度 14,298人

平成13年度 10,354人

平成16年度 22,485人

現在は、校区コミュニティの場として、総代会・PTA・各種団体の利用が盛んである。

図書室には、0歳・子供・大人向きの本が置いてある。

利用状況 平成13年度

利用者数 1,620人 3,212冊

平成16年度

利用者数 1,121人 2,019冊

開館当時の自主グループ活動(昭和58年)

・民謡(伊藤民謡会五並第一教場)

・ヨガ

・詩吟

・日本舞踊

平成17年の自主グループ活動

・詩吟 毎週(金)

・日本舞踊 毎週(月)

・民謡(伊藤民謡会五並第一教場) 毎週(木)

・大正琴 第1・第3(金)

・表現体操 第2・第4(土)

・自彊術<sup>じきょうじゆつ</sup> 毎週(水・木)

・パープルクレヨン 毎週(火)

※民謡、詩吟、日本舞踊は市民館開設当時より続いている。

**イ. 地域いきいき子育て事業** 豊橋市は平成15年度より地域いきいき子育て促進モデル事業が始まった。始まると同時に事業を取り入れ細谷校区市民館に於いてスタートした。これは、学校5日制が実施され年々家庭と地域の教育力が低下している。その受け皿として学校と地域の連携、子どもに対する重要性必要性が増した。子どもが健やかに育つ地域社会を目指し市民館を中心にこの事業に町民一人ひとりが理解し、協力することを望みたい。

講座内容・竹とんぼ作り

・絵手紙

・菓子作り

- ・押し花
- ・囲碁
- ・将棋

講座開催数 26回

延人数 433人 (子供388人)

地域いきいき子育て事業 (平成16年度)

講座開催数 23回

延人数 561人 (子供482人)

細谷児童クラブ開設 (平成15年4月)

利用状況

平成15年 25人 (男13 女12)

平成16年 37人 (男13 女24)

平成17年 29人 (男10 女19)



ゲーム・お絵書きさん

### (3) 校区内慶祝行事

ア. 成人式 「成人の日」制定に伴い、国内各地で新成人を祝う式典や催しが行なわれるようになり、本校区に於いても祝賀の行事が開催された。

初めの頃は、小学校の講堂や体育館を利用していましたが、校区市民館の完成により、冬の寒い時期暖かい部屋で式典が行なわれるようになった。

本校区の特徴を挙げるとすれば、式典終了後の講演会であろう。

講師には、人生経験豊富な学識経験者や、若い人たちに世界に目を向けてもらう意味も込めて、日本の大学で学ぶ外国からの留学生などをお願いした。



成人式での講演会

ちなみに、これまでに講演の講師をお願いした留学生の国籍を紹介すると、隣の韓国を初めとして中国、ベトナム、タイ、ラオス、スリランカなどの国々を挙げることができる。

イ. 敬老会 9月「敬老会の日」の祝賀行事は、婦人会が中心となり青年団の協力により行なっていたが、昭和30年より総代会主催、社教、婦人会、青年団等の共催により実施している。

内容は、「一部 式典」「二部 アトラクション」の形式で行い、アトラクションでは市民館を利用して活動しているグループや、他の教室で技を磨いている人たちによる詩吟や民謡、日本舞踊、ダンス、小学生の演技なども見られ、和やかな雰囲気での催しとなっている。



平成18年 敬老会

## 第3章 教育と文化

### 1 学校教育と幼児教育

#### (1) 細谷小学校のあゆみ

(明治以後のできごとより抜粋)

明治 5年	細谷義校設立 (細谷小学校創立の起源) 上細谷 下細谷	昭和16年	渥美郡二川町南部国民学校 (校名変更)
明治 6年	第十中学区九番小学細谷学校設立 上細谷宝聚庵内	昭和21年	新居海兵団より6教室分移築
明治 7年	小島大応寺内に分教場設置	昭和22年	渥美郡二川町立二川南部小学校 (学制改革により校名変更)
明治11年	愛知県第二大学区第十中学区内 第二十五番小学細谷学校	昭和30年	豊橋市立細谷小学校 (豊橋市へ合併により校名変更)
明治13年	渥美郡第二十番小学細谷学校	昭和34年	3教室新築、東校舎・前校舎取り 壊し、校舎移転
明治20年	渥美郡第一高等小学校尋常小学校 小島学校分校	昭和41年	旧校門前にプール設置
明治21年	下細谷分校を上細谷分校に合併	昭和49年	木造校舎解体(第2棟) 体育館新設
明治21年	渥美郡細谷村立細谷尋常小学校 (小島校より分離)	昭和52年	南校舎鉄筋2階建完成
明治22年	学校を現在地に移転	昭和53年	北校舎3階建特別教室完成
明治25年	細谷村立細谷尋常高等小学校	昭和54年	運動場改修
明治40年	渥美郡二川町立南部尋常高等小学 校(校名変更)	昭和55年	木造校舎解体、北校舎3教室増築
明治42年	渥美郡二川町立南部尋常小学校 (校名変更) 高等科廃止	平成 2年	北校舎増築(配膳室・特別教室)
大正 7年	渥美郡二川町立南部尋常高等小学 校 高等科併設(校名変更)	平成 6年	南校舎外壁改修
		平成13年	運動場側溝設置
		平成15年	強化ガラス入れ替え、校舎耐震工 事、玄関に校章取り付け
		平成16年	小中連携研究発表 (14年度に3年間の研究委嘱を受 ける)
		平成16年	運動場バックネット取り付け
		平成17年	体育館耐震工事完了

現在の細谷小学校



## (2) 細谷小学校の活動紹介

### ●豊かな自然を生かして

#### ①農園の活動

細谷小学校の敷地に「実りの広場」と呼ばれる農園がある。ナスやトマト、スイカ、サツマイモ、ダイコン、キャベツなど、地域の方の協力を得ながら四季折々の野菜を育てている。農園の一角には田んぼもあり、田植えから稲刈り、脱穀にいたるまで、稲の一生を体感する。無農薬のここには、その水辺にさまざまな生き物が集まってくる。オタマジャクシ、アメンボ、トンボ、メダカ……。子どもたちは、米以外にさまざまないのちとここでふれあっていく。米や野菜の収穫の喜び、いのちや自然の恵みを体全体で感じる、理科や総合学習の重要な学習の拠点となっている。ここは、いのちのひろばといえる。

#### ②絵をかく会で

校庭には、運動場や校舎を囲むようにさまざまな大樹がある。プール横にあるクスノキ、農園横にあるホルトの木、飼育小屋横にあるメタセコイア、これらの大樹は時代を超えて子どもたちの成長を見守ってきたと言えよう。そうした樹木に感謝の思いをもちながら、絵をかく会での写生の題材となっている。

### ●地域や他校とのつながり

#### ①小中連携教育

平成14年度から市教育委員会より「小中連携教育の研究委嘱」を受けた。卒業生が入学する五並中学校と隣接する小沢小学校とともに校区全体が一体になった教育活動の展開を目指した。交流や発信を繰り返し、校区全体が活動の場となる広がり、小中9ヵ年、子どもの成長を見届けようとする見通しを大切に、三校の教職員が足並みをそろえた。三校が合同しておこなう授

業研究会をはじめ、連凧揚げや歌声を通して三校がつながった交流会がある。なかでも、連凧交流会では、中学生が本校を訪れ、連凧製作や連凧揚げを教える。将来中学生になる自分を想像しながら、子どもたちは凧作りや凧揚げに励む。また、音楽交流会は、三校の子どもが歌声を披露しあう。特に三校全体合唱の「ふるさと」は、小中学生さらに保護者の美しいハーモニーがひとつになる会場となった五並中学校体育館いっぱいに広がり、交流の素晴らしさを感じさせてくれる。

全学年単学級という小規模な細谷小学校の子どもにとって、これらの実践は、交友関係や生活場面を広げる上で役立っているといえる。二階渡り廊下にある交流掲示板は、五並中や小沢小の今がわかる情報源として役立ち、メールなどで交流する姿も見られている。

#### ②ふるさとを学ぶ

また、ふるさと細谷を拠点に活動の場を広げたものもある。校区ウォークラリーは、校区にある事業所・公共施設を訪れ、地域の方たちとふれあいをもちながら校区を歩く活動である。また、地引網は、アカウミガメが上陸する細谷海岸で地域の方と一っしょに行われる。太平洋の壮大さと海の恵みを実感できる貴重な行事である。このほか、校区調べや校区の歴史や農業の学習で子どもたちが自分の足でふるさとのことを学ぼうと動き出している。

また、運動会、学芸会、マラソン大会など学校行事は、学校恒例の節目の行事であり、子どもたちの活躍の場でもある。保護者だけでなく地域の人たちも足を運び、地域との一体感を感じる行事となっている。

### (3) 緑が丘保育園のあゆみ



私立緑が丘幼稚園当時の園舎

昭和29年に尾崎芳三郎が個人の財産を投じ、緑が丘保育園の前身である私立緑が丘幼稚園を豊橋市内南東部の農業地帯である細谷町に創設した。まだ当時は戦後の混乱と復興の時期であり、更に現在の少子化の時代と違い、第1次ベビーブームの「団塊の世代」といわれる子ども達で溢れていた。親たちは農作業で忙しく子ども達の世話が充分出来なかったが、これからの子ども達の将来を考え、我が子に幼児教育を受けさせたいとの希望が生まれつつあった。しかしながら、幼児教育・児童福祉という公的施設が充分整備させておらず、子ども達に就学前保育を受けさせることは不可能であった。そんな状況を憂い、子ども達になんとか幼児教育の機会をと思い、教員経験者尾崎芳三郎が、幼稚園設立を決意した。

幼稚園創設期の当時の資料を見ると、年長、年中各30名の60名定員であり、授業料は月額500円となっており、また、職員は、園長、教諭1名、助教諭2名、園医、歯科医、用務員各1名であった。そして、園児達は地元細谷校区はもとより、まだ自身の校区に保育園も幼稚園もなかった為、隣の小沢校区、谷川校区の一部、隣接地の湖西市白須賀からも通園していた。しかし、細谷校区以外から通園することは距離的に遠く、送迎が大変という要望があり、オート三輪を購入し、幼稚園バスとして園児送迎も行っていた。舗装道

路もなく、信号機でさえ市内に数箇所しかない時代で、幼稚園バスは、大変珍しかったといわれる。

#### ● 緑が丘保育園への改組及び園舎新築移転

昭和44年に私立緑が丘幼稚園から現在の(福祉法人)緑が丘保育園に組織変更を行った。これは設立当時とは時代が変わり、保護者の要望も受け0歳～2歳の子ども達が入園出来、豊橋市から保育料の補助も受けられる等の理由による。

そして、昭和52年の園舎を細谷町滝ノ上から道を一本隔てた現在の細谷町荒神松に新築移転した。旧園舎の老朽化が進み、更に大雨が降る度に床下・床上浸水が起き、休園となることがたびたびあった為である。又、床下・床上浸水の度に職員や母の会役員総出で掃除や復旧作業に追われたこと等の苦労話も聞いている。

#### ● 緑が丘保育園の現在と今後の活動

平成18年現在では、約200名の子ども達が細谷校区、二川南校区、小沢校区及び湖西市白須賀などから通園している。そして保育時間は朝7時15分～夜7時15分までの長時間保育を行っている。また、これからは少子化が益々進むと云われており、それ故に「子育て支援」、「地域交流活動」が保育園にとって重要な役割となり、この平成18年に「子育てホール」も建設したので、より一層充実した活動が出来、地域の方々に喜んでもらえるものと考えている。



現保育園舎。前の建物は「子育て相談室」



## 2 史跡と伝統行事

### (1) 記念碑

#### ア. 朝倉仁右衛門 (1829～1885)



仁右衛門の碑 (細谷小学校)

朝倉仁右衛門は、文政12年(1829)12月25日渥美郡上細谷村の大庄屋、父朝倉京次郎の嫡男として生まれ幼名を仁作、長じて仁右衛門古完コケンとって朝倉家の9代目を継いだ。幼少の頃は僧祇そうぎであった高部玄益、広田秀山から漢籍を学んだといわれており、後に渥美郡二川の田村家へ商法の見習いに出た。

ところが安政元年(1858)父親が亡くなり、26歳で家業を継いだ。朝倉家というのは庄屋としてこの渥美郡を統括するような形で仕事をやっていた。

若い頃から各方面の施設を改革し、いわゆる地方更生の実を挙げた。即ち時流に即した殖産興業を志し、積極的に地方農村の発展を企画するために養蚕製糸業を奨励した。

維新当初は、茶の栽培を奨励して、農村産業の基幹としようとしたが、これに失敗、明治6年長野産桑苗の栽培に着手した。

翌年には成繭1斗せいけんを収穫し、明治8年には

2倍の収穫を得た。これより、益々長野方面より多数の桑苗を購入して地元有志を勧誘し桑園を開く機運をつくったのである。

このことは養蚕業の将来性について世間の注目を惹起じやっきさせる原因となり、産繭さんけんもしだいに増加するようになったが、製品販売方法については尚、未熟であったため、販路に苦しみ養蚕家の利益は微々たるものであった。しかし養蚕業発展の為の奨励努力が無駄になるのを惜しみ、明治9年より郡中の有志小久保彦十郎、柴田豊水、小柳津忠民、朝倉佐野四郎と図って、豊橋本町に50人繰り座繰製糸を開始した。この時、当時福島県二本松製糸工場くで修行した鈴木田鶴を教婦として招へい、有志の妻女、親戚、知友12名に座繰製糸を伝習させた。しかしこの豊橋本町で開始した座繰製糸は半年程で解散、明治10年より再び有志合同して、改良工夫を加え自宅で座繰製糸を開始したが、これも多大な損失を受けて失敗におわった。

さらに明治10年製糸業の確立促進の為、小柳津忠民、朝倉佐野四郎、下細谷の前田伝次郎等と養蚕業に関する組合赤心組を結成した。組合員は地方有志者、小久保彦十郎、柴田豊水等30余名あったといわれる。組合員は互いに桑葉を持ちより労力を提供し合って、仁右衛門宅で養蚕飼育を続け、産繭収穫に積み立て、製糸業創立費に充てた。すなわち、赤心組は地方振興と産業開発の盛行にかかる情熱に有志が応えて賛助結成した組合であった。この後、実弟忠民と共に長野県その他の製糸業先進地を巡察、座繰製糸の生産能力限界に気づいて、12年9月官営の群馬県富岡製糸場へ伝習生を派遣した。

その伝習生は豊橋地方から選抜された良家の子女13名であったといわれている。

また翌年福島県二本松製糸場及び三春三盛社へ広田辰次郎、前田桂次郎を派遣して実務

を研究させたのである。

豊橋地方では、明治初年より桑苗を長野方面より移入していたが、大部分は粗悪なものであり、明治12年からは福島県より優良品種を求めて一般に頒布し、桑園改良に努めた。

そして明治15年豊橋地方最初の機械製糸工場、即ち細谷製糸場を設立するに至ったのである。

細谷製糸場（上細谷村字苜底）

設立 明治15年秋 50人取り機械製糸工場

社長 朝倉仁右衛門 支配人前田伝次郎

動力 最初は水車動力だったが、翌16年には、この地方では初めての蒸気機関を導入した。社運も向上し数年のうちには、他の模範となるまでに至る。

受賞 明治22年 パリ万国大博覧会  
(1889) 銀賞受賞

明治33年 パリ万国大博覧会  
(1900) 銀賞受賞

明治26年 コロンビア世界大博覧会  
(1893) 優等賞

明治31年 名古屋五県聯合  
(1898) 共進会 1等褒賞

明治38年 米国セントルイス世界大博覧会  
(1905) 金牌

販売先 明治16年～25年 横浜  
明治26年～33年 フランス  
明治34年～ 米国

会社解散

大正6年4月10日、創立以来の株主は全員その株を二川町二川に譲渡「本社」と称えられた細谷製糸は、ここにおわる。

しかしながら、細谷製糸で育った前田伝次郎・大林宇吉らは前田合名、大林製糸へと蚕業豊橋の輪をさらに広げていった。

翁は明治18年7月6日卒去するも、東海のこの天地に製糸工場林立の盛観の基を築いた事は、特筆されるべき事蹟であった。



細谷製糸場跡地に残る赤煉瓦

#### イ. 前田伝次郎（1832～1899）



前田伝次郎碑（医王寺）

出身地：渥美郡下細谷村（現市内東細谷町）  
業績：朝倉仁右衛門・小柳津忠民等とともに蚕都豊橋の基礎を築いた製糸家

前田伝次郎は、天保3年（1832）5月17日渥美郡下細谷村の農家前田喜代次郎の長男に生まれ、幼名を周助といった。

家庭の事情から教育を受けられず、魚の仲買人をしながら生活をし、人づてに聞いた蚕糸業に注目して斯業に入った。

明治9年（1876）、上細谷村朝倉仁右衛門・同佐野四朗、豊橋の小久保彦十郎・富田若水・小柳津忠民等とともに豊橋本町に座繰製糸場

を開設した。しかし、これは技術不足ということもあって失敗に終わった。

続いて、明治10年に再び上細谷村に仁右衛門等と図って座繰製糸を始めたが、これも失敗してしまった。同時に、仁右衛門・忠民等とともに蚕糸業組合である赤心組を結成した。

同組は、各自桑葉を持ち寄り労力を提供し合い、仁右衛門宅で蚕の共同飼育を行なった。

たびかさなる失敗のため、製糸業先進地視察を思いたち、仁右衛門、忠民とともに群馬県の官営富岡製糸場や長野県下の先進地を巡遊視察した。また、明治12年9月には13人の工女を選抜して富岡製糸場に派遣し、翌13年広田辰次郎・前田桂次郎の両名を福島県二本松製糸・三春三盛社におくって技術を習得させた。

明治15年6月、これら派遣した人たちの帰郷を待って、この年秋創設されたのが豊橋最初の本格的な製糸工場である細谷製糸工場であった。会社の経営は、仁右衛門が社長となり、伝次郎は支配人に、前田桂次郎・広田辰次郎が工場の監督にあたり、河合程平・河合常次郎・大林宇吉・金子仁左衛門等が繭買を担当した。

工場も当初は水車動力であったが、明治16年6月からは蒸気機械を導入した。はじめは十分な成績を上げることができなかったが、次第に順調に向かい、他工場でも細谷製糸工場を模範とするようになった。そして、明治29年伝次郎は会社を辞職し、以後監査役となった。

これより先、伝次郎は明治26年自ら前田合名会社を設立して取締役兼支配人に就任した。この会社は、親族子弟を糾合して設立したもので、資本金2万円、74人繰で年々7千斤(4.2トン)以上の生糸を生産するようになった。製品の主な販売先はフランスで、横

浜生糸合名会社を介して直輸出していた。以後、同社は29年に100人繰となり、32年には120人繰に増設し、優等な生糸を生産する会社として知られた。

伝次郎の功績に対する褒賞は数知れず、愛知県知事、三河農会、渥美郡長、農商務大臣、各共進会、大日本蚕糸会等より表彰、賞金を受けた。この地方へ養蚕、製糸技術を普及させた業績は高い評価を受けたが、32年5月3日突然没した。

生前、三男喜市の協力を得て自叙伝執筆に取りかかったが果たせなかった。後年、前田家ではこれを追補して『前田伝次郎略歴』として出版した。なお、翌33年知友の厚志で建碑が企図され、35年3月9日東細谷町医王寺境内に「前田伝次郎君碑」が建設された。

#### ウ. 杉浦六太郎 (1860~1909)



杉浦六太郎碑 (真月寺門前)

杉浦六太郎は、万延1年(1860)に現東細谷町旭島の網元杉浦六右衛門の嫡男として生まれた。

農業に従事するかたわら網元としての立場、現金収入としての漁業の果たす役割の重要性から漁獲高の向上と省力化・能率の向上に意を注ぎ、ことあるごとに先進地域を見て回り、その技法を取り入れようとした。

地形条件のよくなっている九十九里浜視察の

際、地引網で使用しているロクロを見て感激参考にすべく図に書き留めて帰村した。

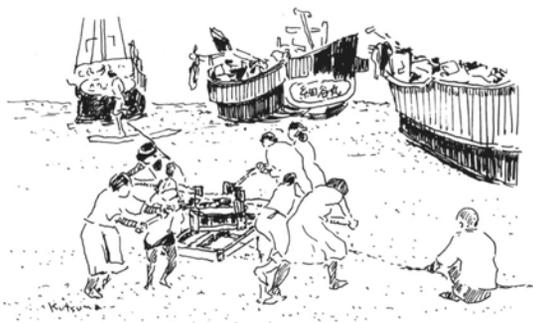
そして大工や鍛冶屋の力を借り、網を巻き上げる道具を作り上げた。

それは、機織りに使う「かせ」を応用したもので、一辺が1.2m程の四角形をしており4隅に4mくらいの棒を差し込んで回すのであるが、牛を使う場合は鞍を着けて引き、手綱は前の棒に縛り付けて同じ円を回るようにし、人間の場合は1本の棒に2人ほど掴まって押す。これを「エントマキ」といい、戦後の地引網は無論のこと、牛がトラクターに変わるまで使用された。

このような彼の功績を後の世に伝えるべく、記念碑が建てられたのである。

ちなみに六太郎は、父の死後「六右衛門」(8代目)を継ぎ、明治42年6月18日、49年の生涯を閉じた。

後年、杉浦家においては六太郎の嫡男杉浦武雄が、衆議院議員として政界で活躍することになる。



ふるさと細谷の絵 ロクロ(エントマキ)

### 工. 杉浦武雄(1890~1963)

杉浦武雄は、明治23年5月20日渥美郡細谷村に生まれた。父六右衛門は熱心な自由党員であったが、武雄はこれに反して反対党である憲政会に入った。

第一高等学校、東京帝国大学法科卒業という秀才で、卒業後は司法省に入って司法官と

して各地を歴任し、大正10年(1921)朝鮮総督府の判事となった。しかし、ほどなく辞して弁護士となり、12年名古屋市大津町(現中区)に事務所を持った。

武雄の中学校時代、理科を担当していた講師に大口喜六がいた。したがって、大口と武雄は師弟の関係であり、この関係から13年に衆議院議員に出馬した武雄は、大口の渥美郡における改進黨以来の地盤を譲り受け、さらに運動方針についても大口から多大の指導を受けたのである。

このときの選挙運動は、渥美郡では同郷の前田桂次郎と前田健次が、また八名郡では県会議員の憲政会加藤正衛が担当した。これら二郡における武雄の陣営は人心をひきつける魅力を持っており、武雄自身も学識経験のある新人雄弁家との評価をうけた。

渥美郡における対立候補は、のち衆議院議員・豊橋市長となった近藤寿市郎であった。渥美郡は、もともと自由党系候補の地盤が強いところであった。しかし、選挙の結果は新人候補の出現によって渥美郡という地盤が大動揺をきたし、また言論戦にも敗れて政友会から立った近藤が落選の憂き目にあったのである。

以後、武雄は昭和3年(1928)と5年には民政党から、また、11年には中立、12年には東方会から立候補して当選を果たした。その間、若槻礼次郎内閣では拓務参与として活躍したのである。しかし、それまで順調に当選を続けた武雄も、日本が戦時体制を強化し太平洋戦争中の17年に行われた翼賛選挙には非推せんで立候補して敗れた。

これより先、武雄は豊橋に豊橋民政青年団という民政党系の団体を設けていた。昭和初年、国家改造運動に呼応してこれを東三新興青年党と改称し、東三政治経済研究所を設立して東三河をこの運動にまき込もうと図っ

た。青年党は、昭和7年市内で幹事会を開いて武雄を総裁とし、白井順一を副総裁として機関誌「東三公論」を発行して運動を盛り上げようとした。そして、青年党はこの年8月に組織改革の必要から豊橋公民会と再改称し、会長にはやはり武雄が就任した。

終戦は、中国にあって山東省経済建設技術人員協会の専務理事として迎えた。26年、市内中八町（現八町通3丁目）で弁護士を開業したが、追放解除後の30年日本民主党から出馬して衆議院議員となった。

晩年は、参議院議員として「春秋会」長老として河野一郎首相実現に夢をかけたが、38年9月12日病没した。かつては、大口喜六・杉浦武雄・鈴木正吾（宝飯郡御津町）の3代議員を選挙区に持つことは東三河の誇りとまで評された人物であった。

#### オ. 伊藤卯一（1867～1941）

出身地：渥美郡細谷村（現市内細谷町）

業績：三河地方における女子実業教育機関の創設者

明治35年（1902）4月、中八町に豊橋裁縫女学校（現藤ノ花女子高校）が伊藤卯一によって開設された。

県内では、女子教育機関は名古屋に2、3校あるだけの時代であったから、その創設は三河における女子教育の黎明れいめいといってよいものであった。

卯一は、慶応3年12月3日渥美郡細谷村の農業伊藤善兵衛の3男として生まれた。細谷尋常小学校を明治13年に卒業したが、中等教育を受ける機会に恵まれず、農業のかたわら同郡田原村の川澄親や太田啓太郎について漢学と英語を修めた。

17歳のとき、教育検定試験に合格し、細谷尋常小学校で教師生活の第一歩を踏み出した。卯一は、同郷の実業家朝倉仁右衛門の社

会への献身的な生き方に大いに影響、感化されたといわれる。

その後、渥美郡谷川・小島、あるいは同郡若戸（現赤羽根町）・泉（現渥美町）などの各小学校で10年間教鞭をとったが、明治33年新しい生き方と教育者としての再生を求めて休職した。そして、上京後帝国教育会中等教員講習所に入り、地理学・歴史学を学んだ。

しかし、翌年冬休みに帰省したとき、思いがけず県立第4中学校舎監の委嘱を受け、そのまま豊橋にとどまることになった。ところが、そのころ豊橋に公立高等女学校（現豊橋東高校）設立の動きがあり、また小学校裁縫専修科の廃止を知った卯一は、期するところあって実業教育を施す女子教育機関、すなわち豊橋裁縫女学校の設立を決心したのである。女子教育への社会への要求がようやく高まってきた時代であったが私立学校の設立はこの地方では初めての試みであった。卯一は、なみなみならぬ決意でその運営維持に臨んだ。明治35年3月県知事に提出された『私立学校設立許可申請書』には、経営のための収入が十分でないときは「教師ハ無給ヲ以テ勤務シ、以テ之ヲ維持セントス」とあった。また、教育目標を「民間実用ノ和洋裁縫編物ヲ主トシ、傍ラ家事生花点茶礼式等ヲ教授シ、且婦徳かんようヲ涵養シ、以テ国家ノ良母タル資格ヲ有セシムル」（前掲申請書）とした。実業教育によって、いわゆる良妻賢母育成をめざしたのである。

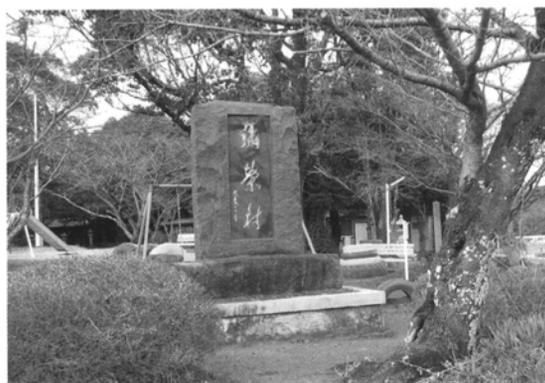
卯一に女子教育機関を設立させるに至った動機は、小学教師時代に見聞した農村家庭の状況の中で、家事・家政からしつけに至るまで無知の者が多く、女子実業教育の必要性を痛感していたからである。

開校後3、4年間は、経営が困難な時期であったが、校舎移転・拡張を行ない、教育環境を整備していった。

以来40年、昭和16年8月14日に死去するまで女子実業教育に心血を注いだ。そして教育理念は「誠を以て勤儉譲を行なえ」というものであった。

なお、卯一は岡田式静座法（田原出身の岡田虎二郎が考案実践した一種の健康法）の実践者、俳人、茶人（南坊流16世家元）、郷土史家としても知られ、その徳を称え胸像と句碑が藤ノ花女子高校に建てられている。

#### カ. 弥栄開拓記念碑



弥栄開拓五十周年記念碑

#### 山崎延吉 略歴

- 明治 6年 石川県金沢市に生まれる。
  - 明治27年 第4高等学校卒業
  - 明治30年 東京帝国大学農芸化学科（現東京大学農学部）卒業
  - 明治34年 28歳で愛知県立安城農林学校の初代校長となる。
  - 明治38年 愛知県農事試験場長となる。
  - 大正14年 公職を辞し自由活動に入る。
  - 昭和 3年 衆議院議員となる。
  - 同 年 満州視察、この前後開拓に力を注ぐ。
  - 昭和21年 貴族院議員となる。
  - 昭和29年 行年82歳に逝去。
  - 7月 正四位 勲二等 瑞宝章
- 生前の氏の農業に関する著作は111に及び、開拓地「弥栄」の名は氏が名付親である。

#### キ. 想い出の地碑



平和への願いを込めて

この碑は、「ここが出征兵士を見送り、帰還者を出迎えた場所。ここに碑を建て、平和へのシンボルとする。」と、細谷町に住む出征経験者71人が協力建立したもので、昭和63年9月23日に除幕式が行なわれた。

細谷町（二川町大字上細谷）には、太平洋戦争当時230世帯ほどあり、この中から出征したのは計144人（中には一家から4人も駆り出されたケースもある）といわれる。

これらの人々の多くが、中国大陸や南方戦線の激戦地に赴き、無事に終戦を迎え生還できたのはわずか75人で、69人の若き尊い生命が失われたのである。

戦時中、赤紙と呼ばれる召集令状を受け取った人は、親族、隣組、各種団体役員、小学生等の参列のもと、八柱神社にて武運長久を祈願し、全員で馬門まかどの地まで足を運んだ。

現在碑の立つあたりは松林で、道路より背丈ほど小高い土手があり、自然のお立ち台となっていた。

出征兵士はそこに立ち「御国のために滅私奉公……」などと力強く挨拶し、郷土の発展を願うことばを残し、万歳の声と出征兵士を送る歌の歌声を背に近親者と共に二川駅に向かった。

残った見送りの人たちは、手に手に小旗を振りながら、無事帰還を祈りつつ、地原の坂に消え見なくなるまでじっと立ち続けた。

また、無事帰還の願いも空しく、酷寒の大陸や灼熱の太陽の下国難に殉じられ、白木の箱に納まった英霊を迎えた悲しい思い出は、この碑の前に足を止める時新たな涙を禁ずることはできない。

この碑は、多くの人々のそれぞれの想いを秘め、今日もたちつづける。



日清・日露戦役従軍記念碑と戦没者慰霊碑

出征兵士を送る歌

1、我が大君に召される 命栄えある朝ぼらけ

讃えて送る1億の 歓呼は高く天を突くいざ征け つわもの 日本男子

日本陸軍

1、出陣

天に代わりて不義を討つ 忠勇無双のわが兵は

歓呼の聲に送られて 今ぞ出で立つ父母の

國勝たずば生きて還らじと 誓う心の勇ましき

ク. 一里塚と立茶屋



一里塚と地藏様

愛国行進曲

見よ東海の空あけて 旭日高く輝けば  
 天地の生氣 澁刺と 希望は踊る大八州  
 おお清朗の朝雲に 聳ゆる富士の姿こそ  
 金甌無欠揺らぎなき わが日本の誇りなれ

愛国行進曲

作曲 森川幸雄 自詞  
 編曲 日藤吉 作曲

♩ = 112~120

みよとう かいの そらあけ べ  
 けくじつ たかく か がやけ ば

静岡県との県境に近い国道一号線沿いに、一里塚がある。南側のものは屋敷の一部となり、僅かに残った跡も大正末期には全く滅失した。北側の塚は、旧東海道の面影を残す東西11メートル、南北14メートル、高さ3メートルの極めて稀な遺構の一つである。

一里塚というのは、徳川家康がつくらせたもので、旅をする人に道のりを知らせるめじりしのことである。これは江戸の日本橋をもとにして、1里（約4キロメートル）ごとにつくらせた。石で築いたものと、土で築いたものがあり、その上には、榎や松を植えて遠くからでもわかるようにした。その当時は旅人に多くの便宜を与えたが、明治以後、交通機関の発達、道路の拡張などにより、大部分

は取り除かれた。

塚の南側に山本清春氏の家があり、昔、立場というお茶屋を営んでいた。立場とは江戸時代宿駅の出入口にあたり、馬をたて、人足・駕籠かき・馬などが休息する掛茶屋である。旅人もここで休息した。

江戸時代のいつ頃か分からないが、下細谷村から東海道へ茶屋を出すように役所からお達しが来た。村には、希望者がなく「くじ引き」で山本家があたった。それ以来代々街道の北側へ茶屋をだした。天保（1830～1843）時代には、この地が「化」とも、化物茶屋とも言われた。これは、昔、山から大蜘蛛のおばけ、変化が出て、旅人を悩ませ、これを土地のお地藏様が退治したという伝説が残っている。

今もこのお地藏様は、一里塚前の、小さな「ほこらに」祀られている。一里山の地名はここからきたと思う。

昭和50年に豊橋史跡として指定された。

現在愛知県下の一里塚の所在地は、「知立、岡崎、一里山、豊明、笠寺」の5箇所だけだそう。

## (2) 信仰と伝統行事

### ア. 昔のお宮

#### ① 細谷町八柱神社

11級社 八柱神社（旧指定村社）

鎮座 細谷町字上大附99番地



細谷町 旧八柱神社

八柱神社の鬼瓦に、室町時代「文亀3年6月吉日、落合左衛門尉家久」の銘文がある。

由緒 神社の創立年代は不詳であるが、細谷郷は高芦の庄の範囲であって細谷郷として認められたのは建久元年（1190年）からである。其の当時既に神社が存在していた事は確かである。神官氏経記に「三河国細谷郷御厨者巖重之神領云々」とあり、寛正5年（1464年）の条によれば、今日口碑に存する勢谷御厨もそれ以前の名称であろうか。徳川家康が隣郷小松原東観音寺に参詣の節、当神社に武運を祈られ、羽衣、神田の二神田を寄進されたと口碑に存している。又今も地名として残っている。

元禄以前は今の海岸に鎮座していたが元禄14年（1701年）の津浪の為部落民移転と共に今の地に遷宮し奉った。

明治4年社格制定により村社に列格、明治42年4月9日八幡社及社宮神社を合祀し奉り、大正12年指定村社に列せられる。

祭神 天之忍穂耳命、天津日子根命、熊野久須毘命、天之菩卑能命、活津日子根命、市寸島比売命、多紀里比売命、多紀津比売命、応神天皇、豊受姫命、伊弉諾命、伊弉册命、菊理姫命

#### ② 東細谷町 八柱神社

13級社 八柱神社（旧指定村社）

鎮座 東細谷町字宮下16番地



東細谷町 八柱神社

由緒 神社の創立年代は不詳であるけれど、神社の所在地細谷は、往古高芦の庄の範囲に属し、細谷郷として認められたのは建久元年からである。其の当時既に神社は存在していた。今の海岸に鎮座されていた所文禄時代数度の海嘯によって海岸の民家の移転と共に神社をも現在の地に遷宮し奉る。昭和7年社殿一切の改築を行い、昭和8年12月5日指定村社に列せられる。

祭神 天之忍穂耳命、天津日子根命、  
熊野久須毘命、多紀里毘売命、  
天之菩卑能命、活津日子根命、  
市寸嶋比売命、多紀津比売命

### ③ 細谷町地原 八幡社

15級社 八幡社 無格社  
鎮座 細谷町字山ノ田21



細谷町地原 八幡社

祭神 応神天皇

地原の氏神様

江戸時代古くは地原村八幡（細谷町）創立寛文2年（1662）（豊橋市史第二巻頁964 近世の神社一覧）と載っている。

細谷町字大口にあった。

古宮と呼ばれ、付近一帯は原野となっていたが、戦後の土地改良事業により田畑となった。

次に西山町の目高田池の西あたりに移された。

更に現在の地 細谷町字山ノ田に移された。1800年代の終わり頃境内にある社務所は三ッ家の氏神様の古いものを買って移築した。

現在の拝殿は昭和9年10月23日、御遷宮したものである。

### ④ 東細谷町弥栄

報徳二宮神社

（宗教学法人に基づく認証されない神社）

鎮座 東細谷町字奥田



弥栄 報徳二宮神社

祭神 二宮尊徳

神社の創立年代は昭和27年4月14日、鎮座地は東細谷町字奥田である。

神奈川県小田原市城内鎮座の報徳二宮神社が、明治27年4月14日の創建に対して東細谷町第八弥栄は昭和27年4月14日鎮座祭を斎行した。

斎行に至る経緯は旧二川町立五並中学校々長の鈴木義雄氏の紹介に拠る処であり、当日は同報徳二宮神社宮司の早川氏が祭主となり、無事斎行終了いたし、二宮尊徳の御分霊を仰ぐことができた。

御分霊奉戴奉持の一行5人（細谷八柱神社宮司村田郁郎・氏子代表小田茂夫・鈴木中・五並中学校長鈴木義雄・笹野教頭の諸氏）に加藤文学博士を加え、一同は国鉄二川駅に午後7時30分到着し、その足で第八弥栄に向った。

第八弥栄の村民は部落の入口で、二宮尊徳先生の御神霊を出迎えんと、提灯を奉持し待った。神霊御着き、直ちに現在地に遷座奉る。

### ⑤ 社宮神

(おしゃもじ様、おしゃぐり様)

御作神、御社宮司、社護神、石神、御尺神、おしゃご、おしゃごさま、しゃごじ、おしゃもじさま、おしゃもつつあん、だいじょぐん等いろいろな呼名があった。社宮神の祀られている土地は長野県に多く、関東と中部一円から和歌山県あたりまで分布していて、その起源は古く縄文時代にさかのぼるといわれる。土俗信仰の路傍の神として祀られていたものといわれる。人々はこの神に子孫繁栄、五穀豊穰<sup>ほうじよう</sup>、大漁祈願、病氣平癒<sup>へいめ</sup>、など願をかけ信仰してきた。大漁祈願を願って社宮神前の織旗を建てる台柱の石に「上細谷水産適建中 大正14年」の文字が見える。大漁の際は漁師が浜からワッショ<sup>わっしょ</sup> ワッショと魚を持って裸参りをした。

現在は八柱神社（大附99）境内に祠<sup>ほこら</sup>があり祀られている。

以前は細谷町字南丸山にあったが昭和40年頃の土地改良事業のため、旧地は畑となり、現在地に遷<sup>うつ</sup>された。

旧地に祀られたのは元禄13年（1700）頃村が前年の台風大浪により屋敷を欠くもの多く、全村丘上に引越した際に移されたものと思われる。

### ⑥ 八幡社

八柱神社の西、現在の国道42号近見山から西山町に通じる道路の近いところにあったというが、場所は不明である。

明治末年神社一覽（豊橋市史第3巻頁1090）にも細谷町八幡社の名が載っている。

### ⑦ 地原弁財天

鎮座 細谷町字地原52ノ3番地



地原 弁財天

境内は明治維新の時までここにあった幸福寺跡。

幸福寺は東観音寺の文書によると天文4年（1535）9月今川の臣 野々山光家東観音寺に細谷幸福寺の寄進状を与えるとある。この幸福寺は寛正5年（1465）頃から今川氏と三河国人との抗争が続く頃潮見坂旧道の中程で殺されたといわれる今川義忠（今川義元の祖父）〔今川氏系図 義忠—氏親—義元—氏真〕の菩提寺として細谷海岸を見下ろす台地の先端に建てられていたが、宝永4年（1707）の大地震ならびに津波のため部落が壊滅した頃上細谷村から地原へ分村して来た人々と共に幸福寺も移って来たらしい。

また元禄12年（1699）の台風大浪にて家屋流失し、元禄13年～17年（1704）にかけて村中引越しの際と記されている方が正しくはないかとも思われる。

地原の弁財天は幸福寺の寺宝として戦国時代、郷土の守り本尊として尊ばれたとか。

京都のアソ川弁天の流れをくむとも伝えられている。地原へ移って来た当初は現在の弁

天堂の下にある弁天堂の中の島に祀ってあった。

明治維新になり神仏分離、廃仏毀釈により廃寺となったが弁天さまは、東地原の故村田良吉さんの父が御嶽さんをしていたとかで、家にかくまっておいた。

程経って現在の弁天堂の東の低い所に祠ほくらを作り祀られた。

昭和30年頃、東観音寺の阿弥陀如来座像の入っていたお堂がいたみのはげしく寺も修理するのも大変とかで当時地原の寺世話人をしていた村田瑞峯さん（譲さんの祖父）が話しかけ地原へ払い下げして頂き現在の弁天堂となり、ここに弁天さまを移し、盛大なご遷宮をした。

弁天さまは現在秘仏となっており拝観することはできないが、木彫りの小さいものである。今川氏にゆかりのある寺の寺宝であっただけに格式があり、明治維新の廃仏毀釈の際、役人が調査の時に「ホソタニ弁天」と言ったのを庄屋がうっかりして返事をしなかったので帳簿から消され、祀ることが出来ず前述の村田良吉家へ預かるようになった。

弁天堂ができてからは毎年1月の成人の日頃を祭礼の日と定め当日は東観音寺の方丈さまに来て頂き般若心経その他経文をあげて頂き、村中弁天さまのお祀りをしている。

餅投げ、甘酒の振る舞いも村人交代でしている。弁天堂の東隣りに十一面観音と庚申様が祀ってある。

はじめは地原八幡社の境内にあったが、弁天堂が出来た際ここに移し祀られた。

## イ. 信仰と行事

### ① 雅楽と舞

細谷町八柱神社秋の大祭に、氏子の中の一部青年達の笙ショウ、篳ヒチリキ、箏、太鼓による雅楽の演奏4人の巫女が「豊栄の舞」を神前に奉納

するものである。

### 神楽歌の歌詞

1. 明けの雲わけ うらうらと  
とよさかのぼる 朝日子を  
神のみかげとおろがめば  
その日その日のとおとしや（以下略）

現在も舞は秋の大祭に奉納されているが楽器の補修や演奏技術の伝承が思うにまかせず、曲はテープに録音したものを利用している。



巫女の舞



神官（宮司）と巫女と氏子総代

### ② 大神宮さま

これは、伊勢神宮にまつられている天照皇大神を信仰の対象とし、伊勢講の「〇〇党」というように仲間を組んでおまつりしている。

江戸時代から「お伊勢まいり」は盛んに行われていたが、一般庶民は年々歳々とはいわず、仲間のうち代表が参拜に出向くとか、仲

間同志が集まってまつるという方法がとられた。

現在でもいくつかのお党があり、それぞれのしきたりに従い、家内安全、五穀豊穡を祈っている。

### ③ 庚申様



廣田家 庚申塔

平安初期に宮廷貴族の間で流行していた庚申講は、その後、武家の間にも広まり、やがて室町時代には一般庶民の間に広く信仰されるに至った。

庚申待こうしんまち、といえ、60日ごとに巡って来る庚申かのえさるの日に寝ないで延命長寿や無病息災を祈る行事である。

まつりの対象は仏教では帝釈天たいしゃくと青面金剛しょうめんこんこうであり、神道では猿田彦をまつる。

この日は部落、隣組、血縁などでつくられたグループ（講）でまとまっておまつりをした。

昭和のはじめころは、食事も悪く、米と麦と半分半分とか、良くて米7分に麦3分のご飯を食べていた時代、お庚申様のお当番が「あさってはお庚申様だで来ておくれんよ」とか「子供さんも来ておくれんよ。」とかふ

れ回って来る。

前もって餅米を集め、当日は庚申様のまつってあるところで餅投げがあったり、当番の家でお供え料理のお下がりや、いつもより白いご飯で呼ばれるのが子供たちにとってこの上ない楽しみであった。

現在では、生活が豊かになると共に地域の共同体意識の希薄化などの理由からか庚申様の回数も年6回から2回に減った。

東細谷町には庚申講が4組あり山の神様に1組、お寺の所に3組がある。この地方の庚申講の信仰は、元禄（1688～1703）の頃から始まったものと思われる。

ちなみに真月寺境内にある広田家一党の庚申塔に享保2年（1717）と記してある。

お百らいといって庚申の夜、当番の家に集まった人たちは、「南無梵天なむぼんてん帝釋たいしゃく青面金剛しょうめんこんこう童子どうじ」の念仏を百回となえる。その後、会食し庚申様のお祭りが終わる。

### ④ 村田家 鎧塚



村田家 鎧塚（地原）  
（建立 平成3年4月）

広見の部落から弥栄へ向かう道を100メートルほど進み坂下の右側の道に沿った森の中に村田家の鎧を埋めたという鎧塚がある。

村田藤吉氏の言によれば、村田家の先祖は田村某という武士であったが、大阪夏の陣の戦い（元和元年1615）で豊臣方に組し、戦い

に敗れ、流れ流れて、この地に帰農したという。

徳川家の目をはばかり姓も村田と改め、よろい、かぶと、刀剣類は家の東方100メートルの山中に埋めた。現在ある鎧塚がそれである。

鎧塚のまわりに生えていた椎の老木は枯れ、新しい椎の木が時の流れを示している。

村田の一族（平成17年現在6軒）は毎年4月29日の休日にこの塚の前で先祖の供養を行い会食をしている。古い系図があったのだが、東観音寺の先々代の方丈さんが預かりもっていかれたままとか。

寺へ行って尋ねてみたが、わからなかった。

弥栄へ通じる道路拡張工事に当たり、このよろい塚を避けて少しカーブして作られたが、今は道ぐろになってしまった。

先祖が移り住んだ頃はまったくの原野で猪など出現しこれを防ぐために屋敷の周りに、堤を築いたが、現在西側に高い土手が残っており、土手の上の椎の古木は当時のままの姿をとどめている。

先祖はここでの農業の暮らしては生計を立てるのが苦しく、一時細谷の海辺の村に移住し居酒屋をしたとか。宝永4年（1707）の大地震、津波の為に再び現在地へ戻った。その際東地原には2軒のみで「2軒家」と呼ばれたとのことである。

現在6軒ある村田家は2軒家の両家からの分家である。

## ⑤ 十王堂

人は死後七日ごと、百か日、一周忌、三回忌に十王の審判を受けるが、遺族の追善供養の力により地獄に落ちることを免れるという『十王信仰』が日本で広まったのは、11世紀（平安時代）以降と言われている。

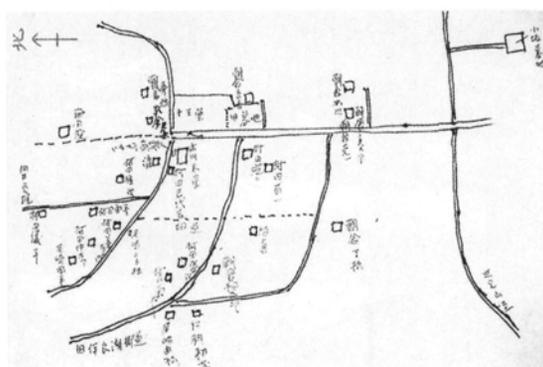
日本では、10世紀頃中国で造られた「十五経」の影響を受けたもので、そこから閻魔王が死後の世界の支配者、裁判官であるとの信仰と道教などが混じりあい、十王信仰が生まれたといわれている。その、十王信仰が日本で元になったといわれている経典、『地藏菩薩発心因縁十王経』（略称 地藏十王経）中には、三途の川や脱衣婆が登場し「別都頓宣寿」と鳴く鳥が描写され、文章も和習をおびるなど、日本で撰せられたことをうかがわせる面が多く見られる。瞑想思想の浸透については源信が記したとされる往生要集がその端緒であると考えられている。鎌倉時代には十王をそれぞれ十仏と相對させるようになり、時代が下るにつれてその数も増え、江戸時代には十三仏信仰が生まれるに至った。

死後の審判は通常七回行われる。初七日には秦広王（しんこう王・本地 不動明王、本地とは「おおもとの仏」の意）の審判を受け、行方定まらないものは三途の川を渡り、二七日に初江王（しよこう王・本地 釈迦如来）の審判を受け、ここでも定まらないと順に、三七日に宋帝王（そうてい王・本地 文殊菩薩）、四七日に五官王（ごかん王・本地 普賢菩薩）、五七日に閻魔王（えんま王・本地 地藏菩薩）、六七日に變成王（へんじょう王・本地 弥勒菩薩）、七七日に泰山王（たいせん王・本地 薬師如来）の審判を受ける。この王の下で地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上の六道のいずれか決定されるため四十九日の追善供養は特に懇ろに行われる。これでも行方が定まらないと百ヶ日に平等王（びょうどう王・本地 観世音菩薩）、ここでも定まらないと一周忌に都市王（ずし王・本地 勢至菩薩）の下に行くと言われるが、遺族の追善供養のおかげで、一周忌の功德により三回忌の五道転輪王（ごどうてんりん王・本地 阿弥陀如来）に送られ、十分に追善供養

をすれば成仏できると云われている。

このような十王信仰は、村民が自分の先祖や家族が死後、迷うことなくあの世(天上界)に行って頂きたいとの思いで、この細谷村(現 十王島内)に十王堂を造り信仰の地とされた。しかし、1868年(明治時代)の神仏分離令・廃仏毀釈運動などにおいて現在は存在していない。

初七日	秦広王	不動明王
二七日	初江王	釈迦如来
三七日	宋帝王	文殊菩薩
四七日	五官王	普賢菩薩
五七日	閻魔王	地藏菩薩
六七日	変成王	弥勒菩薩 (みろくぼさつ)
七七日	泰山王	薬師如来
百箇日	平等王	観世音菩薩
一周忌	都市王	勢至菩薩 (せいしぼさつ)
三回忌	五道転輪王	阿弥陀如来
七回忌		阿閼如来 (あしゅくによらい)
十三回忌		大日如来
三十三回忌		虚空蔵菩薩 (きょくぞうぼさつ)



記憶による十王堂所在地

## ⑥ 山の神さま

宝永4(1707)年10月、紀伊半島潮岬沖、東南海を震源とするマグニチュード8.4の巨大地震が発生。

吉田城は壊滅、当地は大津波に襲われた。現在の海岸線より200メートル沖合いに散在していた村は移転、新たに遠州との境界とした道路脇の丘に松を植え、お堂を建てた。以後、山の神さまと崇められ、松の大木は伐採されたが、毎年11月7日に旭島庚申組が神事に当たる。

## ⑦ 離檀改宗

明治新政府の神仏分離の施行にともなって人々の神道へ改宗する運動が起きた。これには幾人かの農村指導者階級である豪農が主唱者となって、その地域の農民などを説得し、改宗におもむかせたことによるものが大部分である。そのうちの出色の人物として上細谷朝倉仁右衛門、高塚小野田光次郎、西七根高橋小十郎、萩平鈴木平五郎がいた。これらの人々の指導誘引によって、全村あるいは大部分の村民が神道に転じ、寺が廃寺になるに至ったのは、上細谷幸福寺、同宝聚庵、同海月院、小島普門院、西七根龍泉寺、西赤沢慈照寺、萩平浄陰軒等である。また檀徒の一部改宗の寺は、西七根聴松院、城下大円寺、小島大応寺、寺沢東漸寺、中原原中寺、馬越法蓮寺、西川西河院、同大福寺以上檀徒の神道改宗の結果、大きな影響を受けた寺院は、宗派としては大部分臨濟宗、曹洞宗で真宗や日蓮宗にはなく浄土宗も少ない。

指導者に従った村民は、もちろん復古の理念や神道教義を理解したのではなく、むしろ寺領の減少した寺院を将来保持して行く負担を考慮したり、農地や漁業などによって深い利害関係をもつ地域有力者の指導に漫然と従ったというような事情が多かったと思われる。

## 第4章 明日を見る

### 住みよい細谷をめざして

大自然と表浜、海亀が産卵に上がる砂浜のある町 私たちの住む細谷は昭和30年（渥美郡二川町大字上細谷、下細谷、小学校は二川町立南部小学校）に豊橋市に合併した。

その頃は、道路もせまく曲がりくねった細い道路で畑もまだ整備されていなく雑木林も沢山あった。細谷表浜地域は農業と漁業（半農半漁）がこの地域の産業で昭和20年頃迄は養蚕が盛んで製糸工場もあった。細谷の朝倉仁右衛門、東細谷の前田伝次郎ら先駆者によって豊橋蚕都の歴史に残る村でもあった。

現在では農業地帯として地域全体に整備され住宅地も都市化され生活様式も一人一台ずつの車をもって一軒で3台も4台も所有するようになった。

昭和43年には豊川用水が通水しそれにあわせて農地の耕地整理も完成し、豊川用水の通水によってそれ迄は芋麦の栽培が一挙に大規模、機械化され近代的農業に根本的に変化した。

昭和63年4月には公共の地域下水道（五並地域下水道組合）施設も完成し生活面でも都市並みの生活環境になった。

今、国道23号豊橋東バイパスが事業化され、平成17年より用地買収が東細谷より始まり3年ぐらいで延長6キロの買収が終わり、18年度には道路建設工事も始まる見通しで今後基幹道路の開通に伴い細谷校区も大きく変わろうとしている。

今日の目覚ましい経済の発展により流通産業がいやおうなしに押し寄せてくると思う、こ

の道路がこの地域が細谷にとってプラスになるかというただ黙って見つめているだけでは私たちの生活は向上しないと思う。

計画された道路は必ずしも私たちの日常生活や農作業へのかかわりまでも取り込んでくれるとは限らない。だからといって悲観することではない。

私たち知恵を絞り使いやすい地域を形成することだと思う。ただ傍観しているのではなく私たち自身が前向きに歩かなければならないのである。

昭和63年より豊橋市で表浜リゾート開発推進会議が行われてこの会で示された開発区域は細谷より西へ高豊校区まで海岸線に沿った部分の土地を対象として開発していこうということであった。

すなわち、国道42号（表浜街道）より南の部分を開発整備する事である。具体的には東部西部の2つの地域に分けて考えられていた。

東部については、東細谷、細谷、小島町3町をスポーツゾーンと位置付け、ゴルフ場を主体にホテル娯楽施設を造る計画で面積は200ヘクタール、西部高豊地区では大部分が国定公園に指定されているので点的な開発を基本構造としている。

この構想は地域の発展と活性化を目指し乱開発や産業廃棄物処理施設が進出するのを食い止める一つの手段として遊休地を有効活用する目的であった。

しかしながら平成に入りバブル経済も破綻しデフレ傾向で用地収用も100パーセント同意が得られなければ契約ができないとの条件

で平成8年には事業者の西武ゴルフが撤退してしまっただけでなかった。

開発目的による計画地域にネットが被っていたため産廃施設の進出が食い止められていたが西武ゴルフの撤退によりネットが外れてしまったため直ちに先輩の指導のもと同一3町でリゾート対策協議会を設立し平成9年より計画用地に豊橋市都市計画課を窓口に進出企業を探し地域で運動した。

数社の進出企業があったが協議の結果、名古屋の泰成商事がゴルフ場として開発したいということで売買交渉に入ったが条件面で地権者と話し合いがつかず平成11年に組織も解散し現在に至ったのである。

この表浜リゾートゾーンの背後地には私たちが現在生活しているところで周辺は耕地整理に伴い優良な農地が広大にあり温暖な地の利を生かし露地野菜を主に施設園芸が盛んで日本の優秀農業生産地として位置付けられている。

今日のように近代的農業経営が出来るようになったのも祖先、先輩諸氏が地域の将来を見据えて作った有益な遺産である。その優良農地のほぼ中央に国道23号豊橋東バイパスの建設が始まるこの道路のできることで地域産業、経済環境が変わろうとしているわけで道路網の利便性が向上することによって細谷が良くなるか或るいはほかの産業が進出してくる可能性が高くなる。したがって細谷にとって有益になるよう、校区民全員が話し合いたいものである。とりわけ細谷の農業自然環境を守るためにはどのように行動したら良いか協議したいものである。今、細谷で一番心配している問題は環境を破壊する産業廃棄物処理問題ではないだろうか、校区内に産廃の焼却施設が2箇所あり中間処理場、最終処分場など数多くあり中には計画予定地もある。

このところ平成15年より毎年のように焼却施設付近では大気汚染と思われる農作物の被害、道端の雑草が枯れたりしている。付近には住宅もあり人的被害が懸念され3町各自環境委員会組織を作り対応をしている。

被害にあったものを専門検査機関で検査しているが法律に違反するような数値が出ず廃棄物処理法が改正されなければなかなか改善は望めない状態である。

私たち住民が真剣に取り組まなければ将来取り返しがつかない重大問題だと思う。

細谷の海も伊良湖岬まで片浜13里昔は伊良湖まで白い砂浜が続き、このような砂浜はほかにはない希少価値のある海岸であったが最近では浸食が進み高豊以西ではテトラポットを置いて浸食を防いでおり、この細谷海岸も昔よりだいぶ少なくなったが高豊方面に比べればまだ比較的あると思う。

平成18年2月より海亀の産卵地としても有名で希少動物保護の目的で行楽、釣り人の砂浜への車両の乗り入れが全面的に禁止され、今はきれいな砂浜になっている。この海で昔ながら伝来の観光目的と地域のレクリエーションを目的に地引網も行われておりコノシロ、カマス、セイゴ、イワシ等幾多の魚が取れている。

このように憩い場としてほかにはない地の利を生かしコミュニティの場としても生かされている。海と山、大自然の残る素晴らしい故郷、みんなで見つめ直しよりよい細谷にしていきたい。

### 明治以後のできごと

明治初 廃寺 創立不明 細谷町。  
 (1868) 宝聚庵、幸福寺  
 明治 3年 令により東細谷の福泉寺の名が消  
 (1870) える。  
 明治 4年 朝倉仁右衛門・寺子屋廃止。  
 (1871)  
 明治 5年 細谷義校設立。  
 (1872)  
 明治 6年 第10中学区9番小学細谷学校となる。  
 (1873)  
 明治 7年 小島大応寺内に分教場設置。  
 (1874) 廃寺 細谷町 海月院創立 建仁  
 2年(1202)  
 明治 9年 細谷学校教員1名生徒143名。  
 (1876) 下細谷学校教員1名生徒73名。  
 明治10年 朝倉仁右衛門、赤心組を作る。  
 (1877)  
 明治11年 7村合併、五並村となる。  
 (1878)  
 明治12年 富岡製糸へ伝習生派遣。  
 (1879)  
 明治13年 渥美郡第20番小学校細谷小学校と  
 (1880) なる。  
 明治16年 上細谷村に細谷製糸設立。  
 (1883) 細谷小、裁縫教員永田むめ採用。  
 明治18年 歩兵18連隊設置。(豊橋)  
 (1885)  
 明治20年 山本製糸起業。  
 (1887) 尋常小学小島学校分校となる。  
 明治21年 渥美郡細谷村立細谷尋常小学校と  
 (1888) なる。  
 明治22年 市町村制により新村名の細谷村と  
 (1889) なる。  
 学校を現在地に移転。  
 明治23年 細谷村戸数404戸  
 (1890)

明治24年 濃尾大地震。細谷小、高等科併置。  
 (1891)  
 明治25年 打瀬網事件発生。  
 (1892) 細谷村立細谷尋常高等小学校となる。  
 明治26年 前田伝次郎、前田合名会社設立。  
 (1893) 4月17日、朝倉仁右衛門の建碑式。  
 明治27年 前田製糸合資起業。御真影奉戴。  
 (1894)  
 明治28年 第1回修学旅行実施。渥美一巡費  
 (1895) 用8銭。  
 明治29年 細谷駐在所が上細谷に定められる。  
 (1896)  
 明治30年 高等科3ヵ年補習科2ヵ年と定める。  
 (1897)  
 明治34年 上細谷製糸起業。  
 (1901)  
 明治36年 3年生以上に裁縫科、高等科に農  
 (1903) 業科を加える。  
 明治40年 大川・谷川・細谷・小沢村合併、  
 (1907) 二川町となる。  
 渥美郡二川町立南部尋常高等小学  
 校となる。  
 明治41年 細谷小、校門落成。尋常科に手工  
 (1908) 科を加える。  
 明治42年 渥美郡二川町立南部尋常小学校と  
 (1909) なる。高等科は廃止地原高等へ。  
 細谷町八柱神社 八幡社及社宮神  
 社を合祀し奉る  
 (創立年代は不詳である。)  
 明治43年 下細谷信用購売組合設立。教員住  
 (1910) 宅2軒完成。  
 大正 2年 10月14日、最初の校内運動会行わ  
 (1913) れる。  
 大正 7年 二川南部尋常高等小学校となる。  
 (1918) 地原高等の校舎移築  
 便所増築、運動場拡張。  
 大正10年 西山の開拓、中村農園により鋤が  
 (1921) 入る。

- 大正11年 校門前に通用道路80間を開き、農  
(1922) 業実習地を買収。
- 大正12年 奉安庫新築。  
(1923)
- 昭和 2年 東運動場完成。  
(1927)
- 昭和 5年 運動場拡張。門柱落成、建門式。  
(1930)
- 昭和 9年 温室新設。15坪  
(1934)
- 昭和12年 第八弥栄へ入植  
(1937)
- 昭和13年 校地裏を開墾。報徳園とする。  
(1938)
- 昭和14年 二宮先生石像建立。豚舎 2 棟建設。  
(1939)
- 昭和16年 二川町南部国民学校となる。児童  
(1941) 数434名。
- 昭和21年 新居海兵团より、6 教室分移築。  
(1946)
- 昭和22年 二川町立二川南部小学校となる。  
(1947) 六三制実施。  
西校舎 1 棟五並中学へ供出。
- 昭和24年 前東校舎改造、家庭室、宿直室、  
(1949) 給食室とする。  
真月寺 落慶式  
創立 永和 4 年 (1378)  
旧下細谷十ヶ谷の地にあった
- 昭和25年 営林署より山林を借用、植樹。  
(1950)
- 昭和26年 東便所改築。  
(1951)
- 昭和27年 国旗掲揚塔、小鳥小屋設置。  
(1952) 報徳二宮神社(創立) 第八弥栄
- 昭和28年 二川小より教室移築。風呂場、土  
(1953) 俵、観察池完成。
- 昭和29年 二宮像移転、防火用水設置。  
(1954)
- 昭和30年 豊橋市立細谷小学校となる。  
(1955)
- 昭和31年 プール新設、農協西側。完全給食  
(1956) 実施。
- 昭和34年 3 教室新設。旧教室は東細谷出荷場  
(1959) に。東校舎、前校舎は社務所と弥栄  
出荷場になる。玄関、職員室新築。
- 昭和35年 鉄棒完成。  
(1960)
- 昭和36年 バックネット、雲梯完成。  
(1961)
- 昭和37年 東通用門柱設置。  
(1962)
- 昭和38年 裏庭に築山をつくる。  
(1963)
- 昭和39年 温室 1 棟、農協より寄付。はんと  
(1964) う棒設置。
- 昭和40年 プール建設資金百万円寄贈。朝倉  
(1965) 富次氏。
- 昭和41年 プール建設。  
(1966) 五並公営簡易水道竣工
- 昭和42年 T V 各教室設置。  
(1967) 細谷町八柱神社 御遷宮
- 昭和43年 ジャングルジム、体育倉庫設置。  
(1968)
- 昭和45年 鉄筋校舎 2 教室完成。西端。  
(1970)
- 昭和46年 鉄筋校舎4教室完成。  
(1971)
- 昭和47年 校旗完成。  
(1972)
- 昭和48年 鉄筋 2 階建校舎完工。体育館新設。  
(1973)
- 昭和52年 鉄筋2階建校舎完工。  
(1977) 1 階 職員室・校長室・玄関・便所。  
2 階 普通教室 1・図書室・便所。
- 昭和53年 鉄筋3階建校舎完成。理科室・図工  
(1978) 室・音楽室。焼却炉新設。

- 昭和54年 運動場整地。  
(1979)
- 昭和55年 木造校舎(家庭室、図工室)撤去。  
(1980) 鉄筋3階建校舎完工。普通教室3。
- 昭和56年 「ちびっこ富士」完成  
(1981)
- 昭和57年 校区市民館完成。  
(1982)
- 昭和58年 学級園整備。  
(1983)
- 昭和62年 更衣室完成。  
(1987)
- 昭和63年 西武ゴルフ場 誘致  
(1988) プール全面改修。  
農園整備630㎡  
五並処理場稼動  
豊橋表浜リゾート開発発足
- 平成元年 プール管理棟完成。プール北側庭  
(1989) 園完成。  
西倉庫完工。焼却炉及びスレート  
屋根完工。
- 平成4年 県道 表浜街道が国道42号線に昇  
(1992) 格する
- 平成8年 西武ゴルフ場 撤退  
(1996)
- 平成12年 八柱神社社務所竣工式  
(2000)
- 平成16年 23号バイパス用地買収始まる  
(2004) (平成20年代前半には開通予定)
- 平成17年 細谷校区 人口3,104人  
(2005) 世帯数(834)  
男1,587 女1,518  
地原集会所竣工式  
医王寺 落慶式  
創立 天和2年(1682)  
現在地の南方約十町(1,090<sup>坪</sup>)の  
海辺にあった。

### (太平洋戦争と子どもたち)

この思い出話は昭和15年頃渥美郡二川町立二川南部尋常高等小学校に入学した少年たちの太平洋戦争中の生活のあらましである。

この年は、神武天皇が第一代天皇として即位して以来2600年目ということで国内ではいろいろな記念行事が行なわれていた。(この天皇の存在は史実ではなく、古事記・日本書紀による伝説上の初代の天皇)

これは、昭和12年(1937年)に日中戦争が始まり軍国主義・国家主義を進めるための一手段であったともいえる。

昭和16年(1941年)尋常高等小学校は国民学校に変わり、戦時色は日増しに強まっていった。

このような時代の小学校や細谷を舞台に遊びや行事を中心に記憶をたどってみたい。

学校には、年間何回かの式典があり、入学式、始業式・終業式・卒業式以外に「元旦(1月1日)」「紀元節(2月11日)」「天長節(4月29日)」「明治節(11月3日)」などがあった。

「」書きの式典も全員登校し、講堂(3教室分の境のしきりを取り払ったもの)で行なわれた。

およその内容は「校長先生の話」「教育勅語の奉読」「各々の式の歌」であった。

式が終ると日の丸と軍艦旗の印刷された袋に入った固パンを貰い帰宅した。

また、5月27日は海軍記念日といい、この日は海岸で走ったり相撲をとったりして1日を過ごした。

遠足は、1・2年生は「白須賀の潮見坂の観音様」だった。

3・4年生になると「高塚サンドスキー」で、行きは陸路帰りは海辺を歩き漂流物など探しながら楽しい遠足ができた。

そのほか、東は「今切」、北は「岩屋観音」

などで学年により遠近の差があった。

運動会は、いつも八柱神社祭礼の初日10月14日に行なわれた。

場所は、東の運動場と呼び南北に通じる道路より低い運動場だった。

その日は道路が、むしろを敷いた観覧席になり、校区民全員が応援に参加し盛会であった。

14日は運動会、翌日はお祭り子どもたちにとって10月は楽しい秋であった。

学校では、夏休み以外に6月と10月に農繁休暇があり、学校に託児所が開設され低学年の子は妹や弟を連れて参加し、高学年の子は農業の手伝いをした。

当時、子守は母親の手助けとして大切な仕事であり、弟や妹を連れていかなければ遊びに出してもらえなかった。

したがって、小さな子をおんぶして遊ぶ姿がよく見られた。

集まる場所は、校庭、神社の境内、農協の庭など広場があればどこでも利用した。

遊び方は、男女により異なるが、年齢差などはその場その場で工夫し、ハンディをつけることにより誰もが楽しく遊ぶことができた。

遊び方は季節により変わるが、最も楽しいのが夏である。

**つりんぼ**＝池や小川での魚釣り、竿は竹藪で手ごろなものを取り担いで行く。

テグスは思うように手に入らず、時には木綿糸を使用した。

**かえんぼ**＝狭い川の上流を塞ぎ止め、水をかいだして魚をつかまえた。

**魚すき**＝竹みで水草の蔭に隠れているドジョウやフナを捕まえた。

**水泳ぎ**＝細谷の子どもたちの多くは松ヶ谷池で泳ぎを覚えた。

低学年のうちは背の立つ浅い所でバチャバチャ、茶色に濁った水の中で遊んだ。

学年が進み、犬かきや横泳ぎができるようになると、池を横断とか縦断など深いところで遊ぶようになる。

池には、3～4人誘いあって出掛ける。

ある日家の人に内緒で出てきた一人が「今日は、プラでいくか。」と言いだした。

「うんいいよ、そうせまい。」相談は簡単に成立。

青空を見上げての背泳ぎは、誠に爽快であった。

おかげで、その日は濡れた猿股を竹の先にかざして帰らずにすんだ。

その松ヶ谷池の周りは開発が進んで畑となり、大雨のたびに土砂が流れ込み、昔の面影は全く無くなった。

海では漁師の指示で、海の状態や泳ぐ場所など安全確認の上泳いだ。

**自転車乗り**＝自転車の乗り方は、およそ小学校3・4年生頃覚えた。

1軒に1台の実用自転車がある程度で、子供用自転車はなく婦人用もめったにみられなかった時代である。

背の低い子供にとって大人用の自転車で乗り方を覚えるのは大変であった。

どのようにして覚えたかという、まず、車体の三角部分から右足を入れ向こう側のペダルに足を乗せ、緩やかな下り坂を滑降してバランス取りの練習をする。

次に左足もペダルに乗せて回すのだが、自転車が地面に垂直に立っていたのでは人間側に倒れてしまうので、自転車をやや斜めにし、人と自転車をV字形にしてバランスを取るようになるのである。

上に乗れるようになるには、身体的にある程度成長しなければ無理である。

しかし、「まだ おしゃあ三角か。」と言われるのがしゃくで無理をしてでも上に乗ろうとする。

いくら無理をしても背は伸びないので、左足を乗せたペダルが最下部にきた時、尻は中央のパイプよりやや左側下くらいの位置にある。

右のペダルが下がればその逆になる。

体を左右に大きく移動させながら乗るのだが、動くものに乗ることは大変楽しいことなのであちこちに擦り傷をつくりなが

ら遊んだものである。

そのほか、「とんぼつり」「蝉とり」などが男子の遊びであった。

秋は、「アケビとり」「きのことり」「権の実拾い」「栗拾い」など山野の恵みはこどもたちを楽しませてくれた。

冬には、「目白とり」「くびっちょ」「凧揚げ」「縄跳び」「押しくら饅頭」「缶けり」「たがまわし」などに夢中になった。

そのほかの遊びには次のようなものがあった。「竹とんぼ」「こま回し」「竹馬」「竹鉄砲」「かちん玉(ビー玉)」「将棋」「ぱんちい(めんこ)」「チャンバラごっこ」「戦争ごっこ」「ねっき」など。

女の子の遊びとしては、「おはじき」「おじゃみ」「石けり」「まりつき」「あやとり」「人形遊び」「ゴムとび」「双六」「かるたとり」「かくれんぼ」「なわとび」などが喜ばれた。

そのほか、野山に実る食物として「夏グミ、秋グミ」「ヤマモモ」「桑の実」「コナベの実」などがあった。

このころの子供たちの遊びは、自然相手か自作の道具であり、「チャンバラごっこの刀づくり」「凧のひご作り」「こま作り」「くびっちょの仕掛け作り」その他何をするにも刃物が必要で、いつも「肥後守」というナイフがポケットに納まっていた。

ラジオのない家庭も多かった時代であり、家の中には一人で遊ぶ道具もなく自然に外へ出るようになり、日の暮れるまで時のたつのを忘れて遊んだ。

その頃の母親の言い付けは「電気がついたら帰ってこい。」であった。(当時、電気料の契約は、定額とメートルの二つの方法があり、定額の場合はある時刻になると電気がつくようになっていたので電気のつくのは夕方を意味する)

遊びの材料と遊び方

材料	遊び方
ササの葉	笹舟
ススキの葉	とばしっこ
新緑の葉	しばぶえ
カラスエンドウ	笛（緑の莢を使う）
マキ（ホソバ）	手裏剣、目はじき
サトイモの葉	お面
エノコログサ	穂の部分を軽く握る
ウラジロ	馬 茎をY字形にして はじく
ムギカラ	編んで虫かごづくり シャボン玉遊び、他
ツバキの花	糸に通して首飾り
シロツメグサ	花を編んで首飾り、他
レンゲ	同上
ヒガンバナ	茎を交互におり首飾り
サクラの花びら	落ちたのを松葉で刺す
ドングリの実	こま、笛
ツバキの実	笛（中身をだす）
ジュズダマ	首・腕飾り
貝 殻	笛その他、用途多し
石ころ	石蹴り、陣取りその他
竹・笹	笛、空気鉄砲、凧の骨 はじき鉄砲、水鉄砲 弓や矢、竹とんぼ 竹馬、その他 チャンバラ用の刀、他
細長い木の枝	捕獲や飼育の楽しみ
カブトムシ	
クワガタ	
バッタ	
コオロギ	
セミ・トンボ	
クモ	クモの喧嘩
新聞紙や紙類	紙の兜、紙飛行機 他

その他の遊び

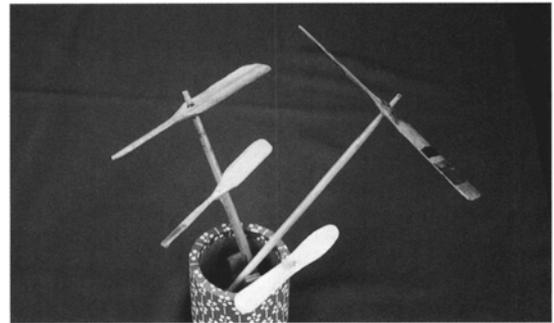
- ・字かくし ・陣とり ・ケンケンパ
- ・ネッキ（先を尖らした釘を地面に突き刺し線で結び陣地を取り合う。）
- ・棒倒し（砂山をつくり頂上に棒を立て片方から手を入れて相手に見えないようにしながら棒を取る。）
- ・水きり（池の水面にまるくてうすい石を投げ、水面を跳んだ回数を競う。）

・こっくりさんについて

（こっくりさんといふ占いは昭和10年前後より数年の間、この地方のみならず各地で流行した占いでその実態は記録された資料が無いようだ。従って年輩の方の記憶を聞いてまとめた。）

半紙にイロハ48文字と0-9までの数字東西南北を書いて割箸3本の上部を縛り2人が箸を手で支えて……「こっくりさん浅間葉山の権現さまここに招き致します。どうぞおいで下さい」と3回繰り返して呪文を唱え紙上の文字を箸の一端が指すことにより願い事の結果を知るという占いである。

最後に「お帰り下さい」と唱えて終わる。但し実施の方法は場所により違いがあるようだがこの地方では以上のようにして占ったが信じてない人もいたようである。）



今、目を閉じると、水田の間を蛇行して流れる小川、灌木が生え甘酸っぱい赤い実のスボを食べた小高い丘や、緑の松に囲まれ澄んだ水を湛える池など、童謡「ふるさと」の歌詞そのままの細谷の姿が浮かんでくる。

昭和16年12月に始まったアメリカとの戦争は、昭和19年度も後半となり戦局も激しさを増すと、「本土決戦に備えて」と、海を見下ろす山や海岸に地下壕や塹壕を掘るために軍隊が派遣され、細谷小学校は「怒203部隊」という軍隊の宿营地となった。

学校の、前の運動場(現在の運動場)は軍隊専用となり、一般には立ち入りできず子どもたちの登下校は東門からとなり、校庭の木々に繋がれた軍馬を眺めるのも楽しみの一つとなった。

空襲警報が出ると授業が中止になり帰宅できるので、放課になると兵隊の寝起きしているラジオのある部屋の窓際へとんでいき、放送を待った。

警報発令は、東海道線を通る列車の汽笛からも知ることができた。

だんだん空襲が激しくなると、田舎でも「もしか爆弾を落とされると」と防空壕を掘るようになった。

この地域では、爆撃の標的となるような物はなかったが、海からの艦砲射撃が一番恐かった。

事実、隣の新居町までは砲弾が飛んできたのである。

学校では、音楽の時間には軍歌を怒鳴り、体育は体力づくりをねらったものが多く、図画は飛行機や軍艦など戦争に因んだものを描き、工作は家から藁を持ってきて縄をなったり藁草履作りなど実用的なものが主だった。

音楽といえば「ド、レ、ミ、ファ……」という音階を省いて語ることはできないが、「ドレミ」は「敵国語であるから使ってはならない」と「ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、イ、ロ、ハ」の8文字が代用され、「ホトイトホトハ

ハ……」というような音階で歌われた。

戦時下食糧増産が叫ばれ農具を持っての登校が多くなり、唐鍬を担いで弥栄へ開墾にも出掛けた。

灌木と笹しか育たない痩せた土地に、肥料も施さずに芋のつるを挿したが多量の収穫を望むのは無理な話で、子どものげんこつ程の物も穫れなかった。

夏休みには、宿題として乾草2貫目(軍馬用として7.5kg、量は学年差あり)などがあり戦時色が強くなるにつれ、遠足はドングリ拾いや落穂拾い・イナゴとりに変わっていった。

このように何となく戦況の劣勢を感じながらも「日本は神の国である。」「国難時には神風が吹く。」ということを感じながら、通学団毎に順番で氏神様に「日参」や「百度参り」などをして、戦地で戦う兵隊さんの無事と日本の勝利を祈願した。【「日参」とは、日参と書かれた紅白の小旗が用意され、その旗を持ってお参りに行き、赤旗を持っていった人は白旗と交換して帰り、次の人に渡すお参りの仕方】

夜には灯火管制といい、灯りの数は最小とし、外に光が漏れないように黒い布や紙を丸く笠から垂らし、極く狭い範囲しか照らさず暗く不自由な生活であった。

1万メートルの上空を飛行機雲を引きながら飛ぶB29爆撃機を見送る日も多くなり、航空母艦から飛び立った戦闘機が超低空で機銃掃射をしながら現れるようにもなった。

海にいてこの機銃掃射のために貴い命を落とされた方もあった。

豊橋の空襲は夜であったため、北西の方向を見ると焼夷弾投下による火災で空は真っ赤に染まり、頭上には南へ帰るB29の灯りが見えた。

豊川海軍工廠の空襲の日は夏休みだったが、鍬を担いで開墾に出掛けた。

現地(牛田の南辺り)に着くと間もなく警報が出てものすごい爆発音が響き、ただ事で

ないものを感じた。

私たちは、松林に潜んで爆撃の終わのを待った。帰る時北西の方角を見ると空高く砂塵や煙が舞い上がり爆撃の凄さを想像することができた。

悲しいことにこの空襲で、私たちの村からも学徒動員として働いていた若い女学生の犠牲者をだすこととなった。

このようにして、「〇〇の戦闘において我が方の損害軽微なり。」の報道を聞かされながら昭和20年8月15日を迎えたのである。

正午のラジオ放送を聴いた感想は、「負けた」というより「終わった」そして「今夜からは明るくしてもいいんだ」という安堵感が強かったように記憶している。

「敗戦」、「これからどうなるのか」というようなことは、子供心にはあまり深刻には映らなかったように思う。

昭和20年9月二学期に登校すると、最初にした仕事は、教科書の戦争に関する部分を墨で黒く塗ることであった。

戦争は終わっても食糧をはじめ色々な物資が不足し、不自由な暮らしは一挙に解決したわけではなく、おやつは「さつまいも」「いも

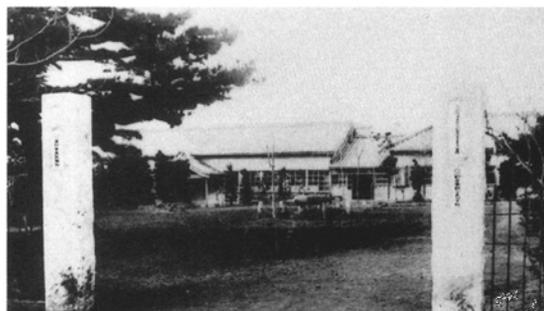
きりぼし」であり、「いも」で育ったといっても過言ではない。

「俺は子どものころ芋を食べ過ぎた。」と  
 いて今ではめったに口にしないおじいさんもいるという。

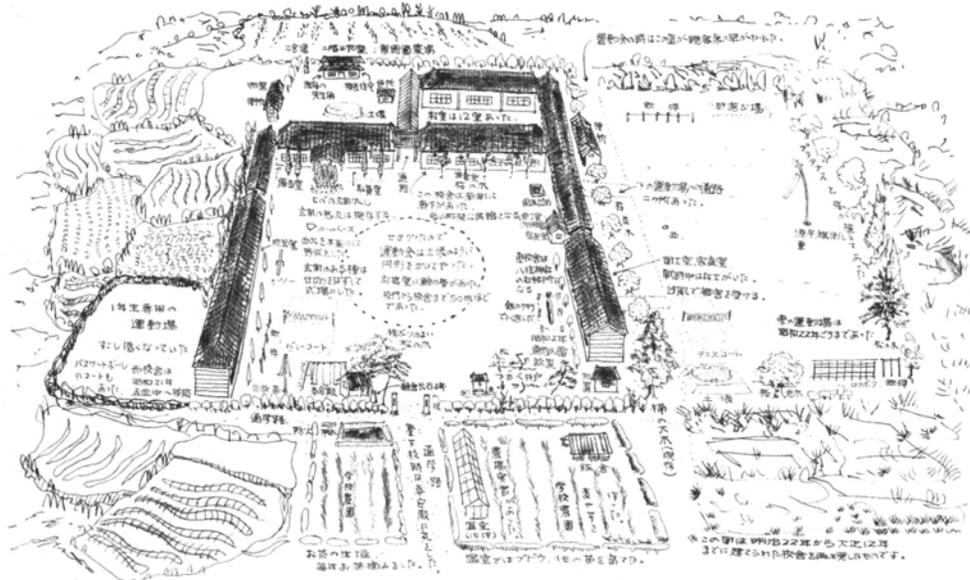
戦後子どもたちの間に流行ったのは「野球」である。野球といっても皮のグラブが手に入らないので厚めの布でそれらしきものを作り、ボールも手作りでバットは丸太を削ったものであった。

広場も思うようになかったし、18人もの人が集まらなかったのも、少ない人数・狭い場所のできる「三角ベース」(塁は2塁なし)で夢中に遊んだ。

こうして子どもたちは、だんだん新しい時代に順応していったのである。



昭和6年の二川町南部尋常高等小学校



※この図は明治22年から大正12年までに建てられた校舎を再現したものです。

# 編集後記

この度、豊橋市制施行100周年記念事業に豊橋校区史の発行が発表され、総代会百周年記念事業推進委員会からプロット立ての考え方が提示されました。

それに沿って細谷校区も平成16年度の総代会が中心になって委員を募って編集委員会を作り、平成17年2月4日に第1回校区史編集委員会が開催されました。

進め方について、いろいろ意見を出していただいたが原稿を書くのは大変難しいことが分かり苦慮しているとき、誰かが「ふるさと細谷」を参考にしてはどうでしょうかといった、しかし、郷土誌「ふるさと細谷」を知らない方も多くいました。

細谷小学校の加藤清教頭先生がその本なら学校で預かっておりますといわれたので、各委員に1冊ずつ配って参考にしてもらうことになりました。

プロット立てについて、細谷校区にふさわしいものと考え、中項目については具体的に記入し、「ふるさと細谷」に載っている関連記事のページも付記して検討した。このプロット立てに基づいて平成16年度の各町総代さんを責任者として、原稿の収集をお願いしました。

平成17年6月には、校区編集委員長、校区総代会長名で細谷校区史の資料の提供をお願いしましたが、資料提供はありませんでした。

資料不足を補うには「ふるさと細谷」が頼りでした。

したがって、ふるさと細谷の縮小版となってしまいました。

その後、一部の方の努力により資料の収集が進み、平成18年5月24日に第2回の編集委員会が開かれ、ほぼ出来上がった原稿チェックのお願いをしました。

豊橋市制施行100周年記念校区史は、市内51校区が統一されたホームで作られますので、ページ数に制約があり「ふるさと細谷」が全て掲載されるわけではありませんが、平成元年以後の出来事も追加しました。

校区全体の方々に、自分の生活する地域の成り立ちや発達の様子などを知っていただき、地域を誇りに思い、愛し、育てていく気持ちをさらに高めていくために、地域の歴史を主体としながらも、現状や将来のわかる読み物を作成するように心がけました。

このたびの、細谷校区史編集に利用した、「ふるさと細谷」の基を作られた、ふるさと文化を語る会実行委員、編集委員の皆さんに心から感謝申し上げます。

また、農業の傍ら資料集めに奔走された委員、写真の撮影に奔走された委員、パソコン入力に携わった各委員その他、多くの方々のご協力により、何とかまとめあげることができました。

寄稿いただいた方々並びに校区史編集委員の皆様にも重ねて御礼申し上げます。

最後に、この細谷校区史を読んで細谷の歴史に触れていただければ幸いです。

## ■参考文献

- ・ふるさと細谷（平成元年細谷校区発行）
- ・郷土豊橋を築いた先覚者たち
- ・豊橋市神社誌・豊橋寺院誌
- ・豊橋市史 第3巻より
- ・とよはしのアカウミガメ（平成10年3月豊橋市）
- ・五並地区コミュニティマップ
- ・荒地につなぐ手
- ・日本史辞典

## 細谷校区史編集実行委員

### ■執筆および資料提供者

伊藤稔、加藤哲也、細谷小学校、村田象、河辺清治、広田政幸、尾崎弘直、鈴木慎之助、伊藤定雄、山田正臣、村田文男、村田真咲(故人)、山本孝夫、朝倉利昭、鈴木修二、村田昇司、前田保弘、市川剛、村田修一、山本軍、村田義孝、山本武雄、鈴木慎之助、彦坂佳生、彦坂佳生、彦坂和宏、山田孝志、山本和宏、岡本睦子、半田権次郎、細谷小学校長、教頭、朝倉よね子

### 校区のあゆみ 細谷

平成18年12月25日発行

編集 細谷校区総代会  
細谷校区史編集委員会  
発行 豊橋市総代会  
印刷 共和印刷株式会社



環境省認定 100%再生紙







2006年  
市制100周年  
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋